

成田市十余三四本木Ⅱ遺跡

— 航空無線施設用地内埋蔵文化財調査報告書 —

平成14年3月

新東京国際空港公団

財団法人 千葉県文化財センター

なりたしとよみしほんぎ
成田市十余三四本木Ⅱ遺跡

— 航空無線施設用地内埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第425集として、新東京国際空港公団の航空無線施設建設事業に伴って実施した成田市十余三四本木Ⅱ遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代の遺構や早期縄文土器、石器群が検出されるなど、この地域の縄文時代社会の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土の歴史の理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成14年3月25日

財団法人千葉県文化財センター

理 事 長 清 水 新 次

凡　　例

1. 本書は、新東京国際空港関連無線施設の建設に伴う成田市十余三地先に所在した十余三四本木Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、新東京国際空港公団の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 調査で使用した遺跡のコード番号は211-062である。
4. 発掘調査は平成12年度に実施し、整理作業は平成13年度に実施した。
5. 発掘調査及び整理作業の担当者は第1章に記した。
6. 本書は調査部長佐久間 豊、東部調査事務所長折原 繁の指導と助言のもとに、主席研究員宮 重行、研究員永塚俊司が執筆したものを、宮が編集した。本文の執筆分担は以下のとおりである。
宮 重行 第1章、第2章第1節1及び2（1）、同章第2節、第3章
永塚俊司 第2章第1節2（2）
7. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
国土地理院発行 1/25,000地形図「佐原西部」(N I - 54-19-9-2), 「滑川」(N I - 54-19-9-4),
「新東京国際空港」(N I - 54-19-10-1), 「成田」(N I - 54-19-10-3), 成田市都市計画図
1/2,500
8. 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。
9. 写真図版に使用した空撮写真は京葉測量株式会社が平成11年1月に撮影したものを使用している。
10. 本書に収録した遺物及び記録類は、当文化財センターで保管している。
11. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から多くの御協力・御指導をいただいた。
それぞれ記して謝意を表する次第です（順不同・敬称略）。
千葉県教育庁生涯学習部文化課、成田市教育委員会、新東京国際空港公団の関係者各位。

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法	1
第2節 遺跡の位置と環境	3
1 遺跡の位置と地理的環境	3
2 層序	5
第2章 遺構及び出土遺物	9
第1節 縄文時代	9
1 遺構	9
(1) 陥穴	9
(2) 土坑	9
2 包含層出土遺物	10
(1) 土器	10
A 分布状況	10
B 各群の土器	12
(2) 石器	23
第2節 中・近世以降	29
1 遺構	29
第3章 まとめ	29

挿図目次

第1図 遺跡周辺地形図 (1:5,000)	1	第12図 出出土器 (4)	17
第2図 調査区 (1:1,600)	2	第13図 出出土器 (5)	19
第3図 周辺の遺跡 (1:25,000)	4	第14図 出出土器 (6)	20
第4図 標準土層.....	5	第15図 出出土器 (7)	21
第5図 遺構配置図 (1:1,000)	7	第16図 出出土器 (8)	22
第6図 検出遺構.....	9	第17図 出土石器 (1)	24
第7図 出出土器比率グラフ.....	10	第18図 出土石器 (2)	25
第8図 出出土器分布状況.....	11	第19図 出土石器 (3)	27
第9図 出出土器 (1)	13	第20図 磁グリッド別出土状況.....	28
第10図 出出土器 (2)	14	第21図 磁重量ヒストグラム.....	28
第11図 出出土器 (3)	15		

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧.....	5	第3表 出土石器観察表.....	26
第2表 出出土器比率.....	10	第4表 磁石材構成.....	28

図版目次

図版1 遺跡空撮写真 (縮尺約1:10,000)	図版8 出出土器 (4)
図版2 遺跡近景、確認調査状況	図版9 出出土器 (5)
図版3 本調査区遺物出土状況、尖頭器出土状況	図版10 出出土器 (6)
図版4 001号跡、007号跡、003号跡	図版11 出出土器 (7)
図版5 出出土器 (1)	図版12 出土石器 (1)
図版6 出出土器 (2)	図版13 出土石器 (2)
図版7 出出土器 (3)	

第1章 はじめに

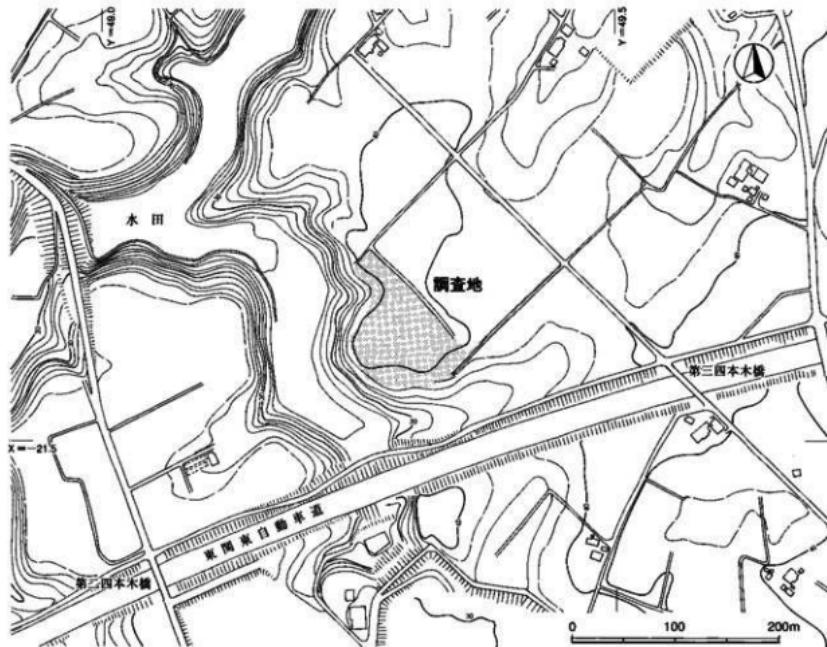
第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

財團法人千葉県文化財センターでは、新東京国際空港予定地内及び関連事業地内に所在する遺跡について、千葉県教育委員会の指導のもと、新東京国際空港公団の委託により、昭和51年度から計画的・継続的に発掘調査を実施してきている。また、これらの発掘調査成果の一部は既に多数の報告書として刊行されているところである。

今回報告する十余三四本木II遺跡は、C滑走路用の航空保安無線施設の設置が計画されたため、千葉県教育委員会と新東京国際空港公団との間で取り扱いについて協議した結果、発掘調査を実施して記録保存することとなり、用地10,000m²のうち、建物予定地及び道路部の1,475m²については上層及び下層の確認調査と本調査まで、それ以外の用地8,525m²については上層の確認調査のみを実施する運びとなった（第1図）。

発掘調査と整理作業の期間及び調査体制は以下のとおりである。



第1図 遺跡周辺地形図 (1:5,000)

発掘調査

期間 平成12年5月1日～平成12年6月29日

担当 東部調査事務所長 折原 繁

主席研究員 宮 重行

整理作業

期間 平成13年4月1日～平成13年5月31日

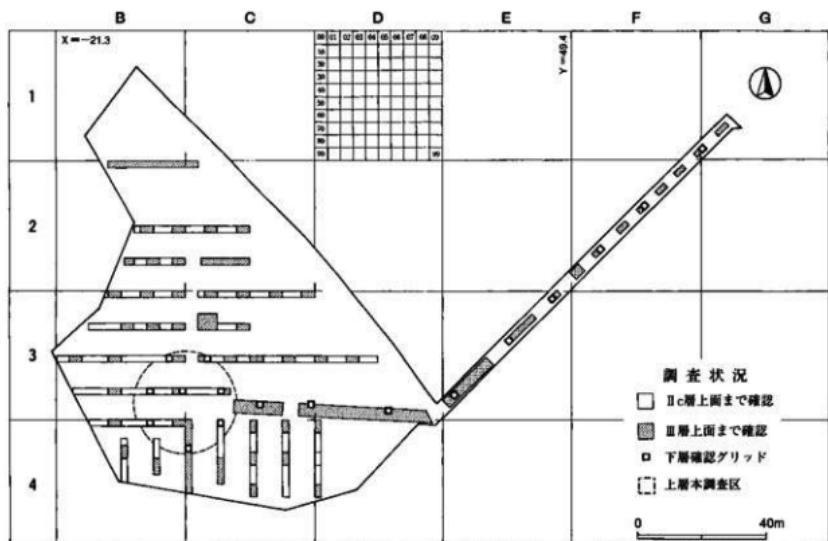
担当 東部調査事務所長 折原 繁

主席研究員 宮 重行

2 調査の方法

発掘調査を始めるに当たり、調査対象区域に公共座標に合わせて、40m×40mの大グリッドを設定した。さらに、その大グリッド内を4m×4mに分割し、100個の小グリッドとした。大グリッドは北から南へ0, 1, 2, 3……、西から東へA, B, C……と記号をつけ、小グリッドについては北から南へ00, 10, ……, 90、西から東へ00, 01, ……, 09と番号をつけ、これらを組み合わせて呼称した（第2図）。

上層確認調査は用地全面に幅2mのトレンチを適宜設定し、ソフトローム層上面まで掘り下げて遺構と遺物の分布を確認したが、建物部を含む南側に縄文時代早期遺物包含層がひろがることが認められたため、建物部分707m²を本調査することとした。また下層確認調査では建物及び道路部分1,475m²について、2m×2mのグリッドで、対象面積の4%を設定して行ったが、石器の出土が認められず、確認調査で終了



第2図 調査区 (1:1,600)

した（第2図）。

上層本調査では、遺物包含層直上まで重機により表土を除去した後、下位の包含層の遺物の出土状況記録・取り上げ作業を行い、遺構検出作業をしながら、人力でソフトローム層まで除去した。その結果、縄文早期撚糸文系土器、三戸式・田戸下層式土器、浮島式土器等の遺物包含層、縄文時代陥穴、土坑1基ずつ、中・近世の炭焼遺構1基を検出した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

千葉県北部の下総台地と呼ばれる広大な洪積台地は、大小の河川に浸食された樹枝状の谷によって深く刻まれており、複雑な地形を呈している。周辺には、旧石器時代から縄文時代早・前期にかけての遺跡が多く見られる（第3図）。

今回報告する十余三四本木II遺跡は、新東京国際空港C滑走路の北端に隣接し、南側を東関東自動車道が東西に走っている。北側に荒海川、東側には尾羽根川の支谷が入り込み、開拓された台地部分にある（第1図、図版1）。標高は約40mで、周囲の水田面との比高差は約20mである。東関東自動車道（成田地区）で調査された十余三四本木I遺跡（四本木遺跡）¹⁾が、谷をへだてて、当遺跡の0.4km西側に位置する。

旧石器時代の遺跡では、南側の台地続きにひろがる広大な成田空港用地内に多数の遺跡が存在する。十余三四本木I遺跡でも石器群が2ブロックが検出された。当遺跡から南に約1km南には十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）²⁾があり、その西側に接して細石刃を多数出土した大規模な遺跡の十余三稻荷峰遺跡（空港No67遺跡）³⁾が位置している。そのさらに南側は遺跡の枚挙にいとまがないほどである。遺跡北側では調査例が少ないために、遺跡の所在はあまり知られていない。

縄文時代では、この周辺地域のはとんどの遺跡で縄文土器（早期・前期）の包含層を伴っていることを特徴とする。

荒海川水系では、まず十余三四本木I遺跡があげられる。出土遺物は早期撚糸文系土器を中心に、前期織維土器を加える。また有舌尖頭器が1点出土している。野毛平古墳群⁴⁾では早期撚糸文系土器、後期の土器が若干出土している他、石器や有茎の尖頭器が得られている。北側に連なる台地上にも多数遺跡が点在している。土室長山第1遺跡（林北遺跡）⁵⁾、土室長山第2遺跡（長田遺跡）⁶⁾では子母口式土器を中心とした条痕文系土器が出土している。荒海川をさらに下ると、標式遺跡である荒海貝塚に象徴されるように、後・晚期の遺跡が増加する状況がうかがえる。

当遺跡の所在する台地の東側縁辺部、尾羽根川に面した稲荷峰遺跡⁷⁾では、早期末から前期初頭の住居跡が多数検出されている。出土した土器は田戸下層式や条痕文系土器が主で、前期織維土器、中期の加曾利E式土器もみられた。稲荷峰遺跡の南側、尾羽根川の上流の台地にも多数の早・前期の遺跡が確認されており、また北側の大須賀川支谷に面した地区には、田戸下層式の集落跡である芝椎ノ木第1遺跡（椎ノ木遺跡）⁸⁾をはじめ、雨郷台IV・V・VI・VII遺跡が所在する。

当遺跡から南へ連なる台地の取香川支谷側には、沈線文の包含層を伴う十余三稻荷峰西遺跡があげられる。その東隣の十余三稻荷峰遺跡では三戸式を中心とした沈線文系土器と条痕文系土器を伴う多数の住居



第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	旧遺跡名	所在地	No	遺跡名	旧遺跡名	所在地
1	十余三四本木Ⅱ遺跡	成田市十余三	成田市十余三	12	取香和出戸遺跡	空港No60遺跡	成田市取香
2	十余三四本木Ⅰ遺跡	三四本木遺跡	成田市十余三	13	東峰御幸煙西遺跡	空港No61遺跡	成田市東峰
3	十余三種荷峰西遺跡	空港No65遺跡	成田市十余三	14	東峰御幸煙東遺跡	空港No62遺跡	成田市東峰
4	十余三種荷峰遺跡	空港No7遺跡	成田市十余三	15	古込遺跡	空港No14・55・56遺跡	成田市古込
5	野毛平占墳群	成田市野毛平	成田市野毛平	16	長田和田遺跡		成田市長田
6	上室良山第1遺跡	林北遺跡	成田市土氣	17	野毛平植出遺跡		成田市野毛平
7	上室長山第2遺跡	長山遺跡	成田市土氣	18	長田土上台遺跡		成田市長田
8	梅原峯遺跡		成田市十余三	19	野毛平木戸下遺跡		成田市野毛平
9	芝根ノ木第1遺跡	椎ノ木遺跡	成田市芝	20	長田雉子ヶ原遺跡		成田市長田
10	南郷台N~V遺跡	大栄町富津浦	成田市南郷	21	長田香花田遺跡		成田市長田
11	天神峰最上遺跡	空港No54遺跡	成田市天神	22	野毛平上之内遺跡		成田市野毛平

跡を検出している。その南側に隣接する天神峰最上遺跡（空港No64遺跡）¹¹⁾では撲糸文土器を主体とする包含層を検出した。またさらに南側には取香和田戸遺跡（空港No60遺跡）¹⁰⁾、東峰御幸煙西遺跡（空港No61遺跡）¹⁰⁾、東峰御幸煙東遺跡（空港No62遺跡）¹⁰⁾、古込遺跡（空港No14遺跡）¹⁰⁾等の大規模な遺跡群が所在している。

遺跡南西側、取香川本流に南面した地区では、長田和田遺跡¹⁰⁾で前期黒浜期・閏山期の集落が検出されているほか、野毛平植出遺跡¹⁰⁾では田戸下層式土器が出土し、長田土上台遺跡¹⁰⁾では撲糸文期及び条痕文期の包含層が検出されている。なお早・前期以外では野毛平木戸下遺跡¹⁰⁾、長田雉子ヶ原遺跡¹⁰⁾、長田香花田遺跡¹⁰⁾の中期加曾利E期の大規模な集落遺跡が所在する。また野毛平上之内遺跡¹⁰⁾は中期阿玉台式、加曾利E式の大規模遺跡である。

2 層序

当遺跡では下層遺物の出土はなかったが、基本土層について以下に記しておく²¹⁾（第4図）。

- I 層 表土及び耕作土層。畑部分にはトレンチャーによる耕作が行われている。
- II b 層 橙褐色の新期テフラ層。畑部からはずれた台地縁辺で検出された。暗褐色土に混じっている状態であり顕著ではない。台地中央側は厚く、谷よりは薄い。
- II c 層 暗褐色をなす。本来はもっと黒みが強く、III層との間に漸移層がみられるはずであるが、傾斜があるためか、堆積が薄く、明瞭に区別できない。また谷よりはIII層と区別が付きにくい。
- III 層 ソフトローム層
- IV 層 以下はハードローム層になる。赤色スコリアを含み、全体的に赤みを帯びる。
- V 層 II層と比較してやや黒い色調を呈するが、下層のATの拡散により全体的には白みを帯びている。
第1黑色帶に相当する。IV層・V層は本遺跡では分類できない。



第4図 標準土層

VI 層 A T 包含層

VII 層 A T の拡散によりやや明るい色調であるが、第2黒色帯上半部に相当する。

IX a 層 径10mm前後の黄色の粒子を多量に含む。第2黒色帯下半部上部に相当する。

IX c 層 黒色、緑色スコリアを含む。IX a 層に見られる黄色の粒子ではなく、もっとも黒い色調を呈する。

第2黒色帯下半部下部に相当する。IX a 層、IX c 層は本遺跡では分離できなかった。

X 層 色調の違いにより上下2層に分層できる。武藏野ロームとの境界は波状を呈する。立川ローム最下層である。

注1 斎木 勝他 1985「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告 成田地区I」(財)千葉県文化財センター

2 宮 重行・永塚俊司 2000「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XII 十余三稻荷峰西遺跡(空港No68遺跡)千葉県文化財センター調査報告 第386集」(財)千葉県文化財センター

3 石橋宏克 1988「新東京国際空港No67遺跡出土の三戸式土器」「研究連絡誌」第22号(財)千葉県文化財センター

4・5 注1文献

6・7 石橋宏克 1989「成田市林北遺跡・長田遺跡 一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書II 千葉県文化財センター調査報告 第163集」(財)千葉県文化財センター

8 高橋 誠・宮 文子ほか 1987「成田市産業廃棄物処理場予定地内埋蔵文化財調査報告書 椿の木遺跡 財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第15集」(財)印旛都市文化財センター

9 宮 重行・永塚俊司 2001「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XV 天神峰最上遺跡(空港No64遺跡) 千葉県文化財センター調査報告 第405集」(財)千葉県文化財センター

10 宮 重行・新田浩三 1994「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ 取香和田戸遺跡(空港No60遺跡) 千葉県文化財センター調査報告 第244集」(財)千葉県文化財センター

11 宮 重行・永塚俊司 2000「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIII 東峰御幸畠西遺跡(空港No61遺跡) 千葉県文化財センター調査報告 第264集」(財)千葉県文化財センター

12 現在整理中

13 西野 元他 1971「三里塚 新東京国際空港用地内の考古学的調査」(財)千葉県北総公社

野口行雄 1983「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書III No14遺跡」(財)千葉県文化財センター

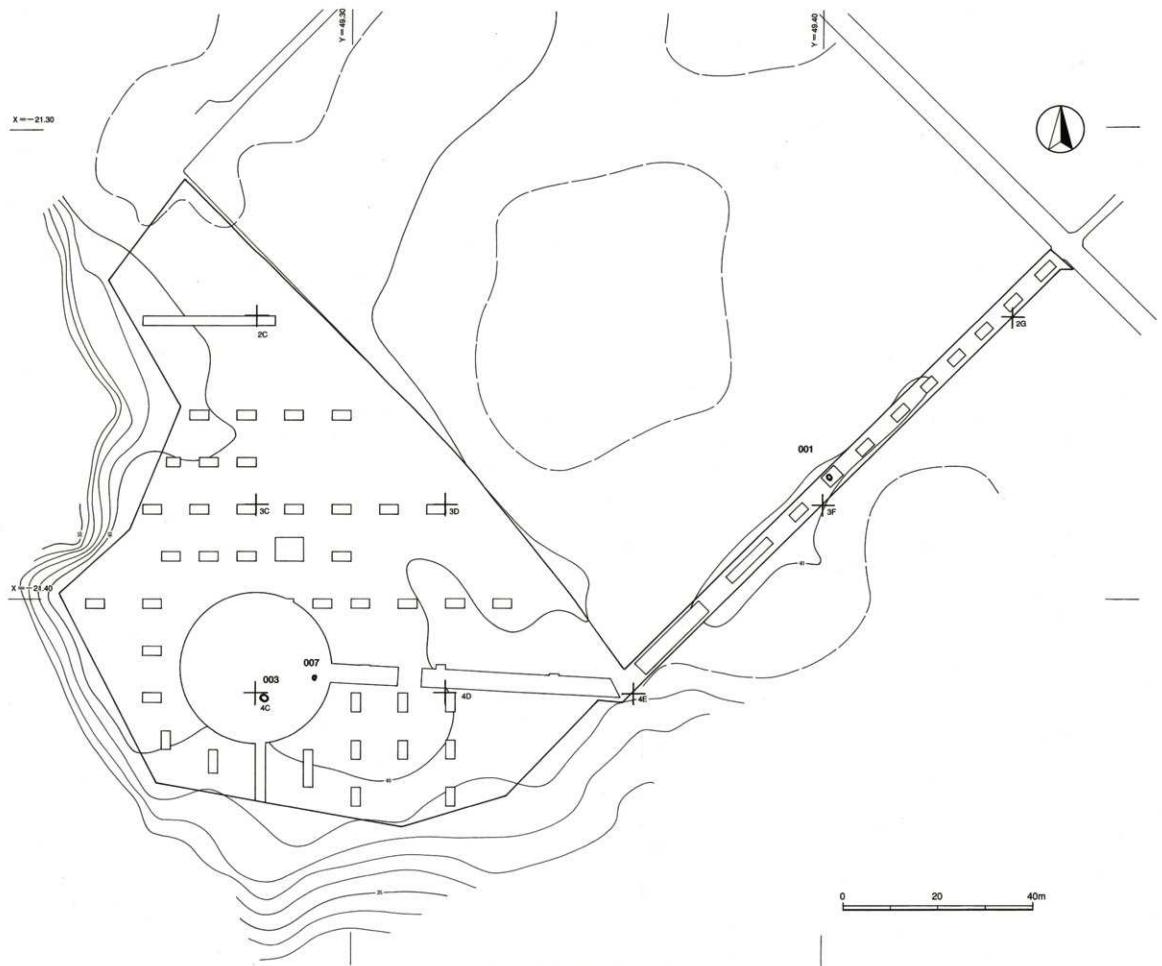
14 喜多圭介 1989「千葉県成田市長田和田遺跡 ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(I) 財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第30集」(財)印旛都市文化財センター

15~17 喜多圭介他 1990「千葉県成田市野毛平木戸下遺跡・野毛平向山遺跡・野毛平植出遺跡・野毛平千田ヶ入遺跡・長田舟久保遺跡・長田土上台遺跡 ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(III) 財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第32集」(財)印旛都市文化財センター

18・19 喜多圭介 1989「長田堆子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡 ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(II) 財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第31集」(財)印旛都市文化財センター

20 現在整理中

21 島立桂・新田浩三・渡辺修一 1992「下総台地における立川ローム層の層序区分」「研究連絡誌」第35号(財)千葉県文化財センター



第5図 遺構配置図 (1:1,000)

第2章 遺構及び出土遺物

第1節 繩文時代

1 遺構

検出された遺構は、陥穴1基と土坑1基である。

(1) 陥穴

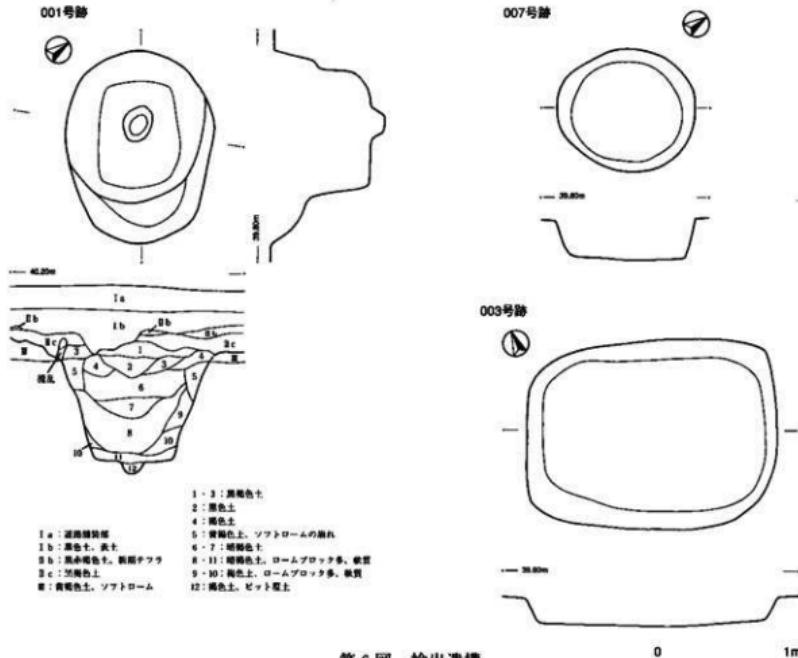
001号跡 (第6図、図版4)

進入路の中程、2F80グリッドに位置する。開口部の平面形は長軸1.50m、短軸1.15mの橢円形で、主軸方位はN-52°-Wである。底面は長軸0.83m、短軸0.66m、ローム面からの深さ0.89mである。底面は堅く平坦で、中央に径0.28m×0.22m、深さ0.13mの小ピットがある。壁は底面から垂直に立ち上がり、上部が開く。遺物は出土していない。

(2) 土坑

007号跡 (第6図、図版4)

本調査区内の3C93グリッドに位置する。平面形は長軸1.07m、短軸0.94mで、ほぼ円形である。深さ



第6図 検出遺構

は0.33mである。主軸方位はN-33°-Eである。床はほぼ平らで、壁がゆるやかに立ち上がり、断面形が鍋底状をなす。壁・床はソフトローム中にあり、軟弱であった。遺物は出土していない。

2 包含層出土遺物

(1) 土器

A 分布状況 (第7・8図、図版3)

包含層からは1,300点あまりの縄文土器が出土したが、それらを以下のように4群に大別して説明する。

第I群土器 早期前葉の撚糸文系土器

第II群土器 早期中葉の沈線文系土器

第III群土器 早期後葉の条痕文系土器

第IV群土器 前期浮島式土器、前期末～中期初頭斜縄文土器およびそれ以降のもの

現地は大半が畠地となっており、トレンチャーによる耕作痕が縦横に入っていた。出土量表・分布図にはトレンチャー耕作内の遺物も数量を入れている。実際にプライマリーな層から出土したものはその半数程度である。各群の分布状況は以下のとおりである。

第I群土器 調査区南西部、特に本調査範囲に集中している。出土土器の約30%を占める。

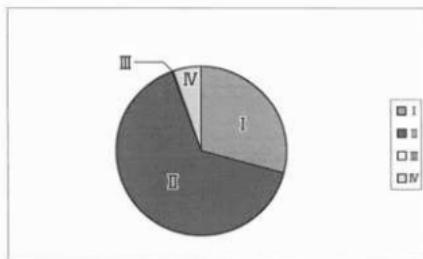
第II群土器 出土土器の約65%を占め、比率が最も高い。ほぼ全城で得られているが、特に調査区南部が分布密度が濃い。

第III群土器 3Bグリッドで4点のみ出土した。

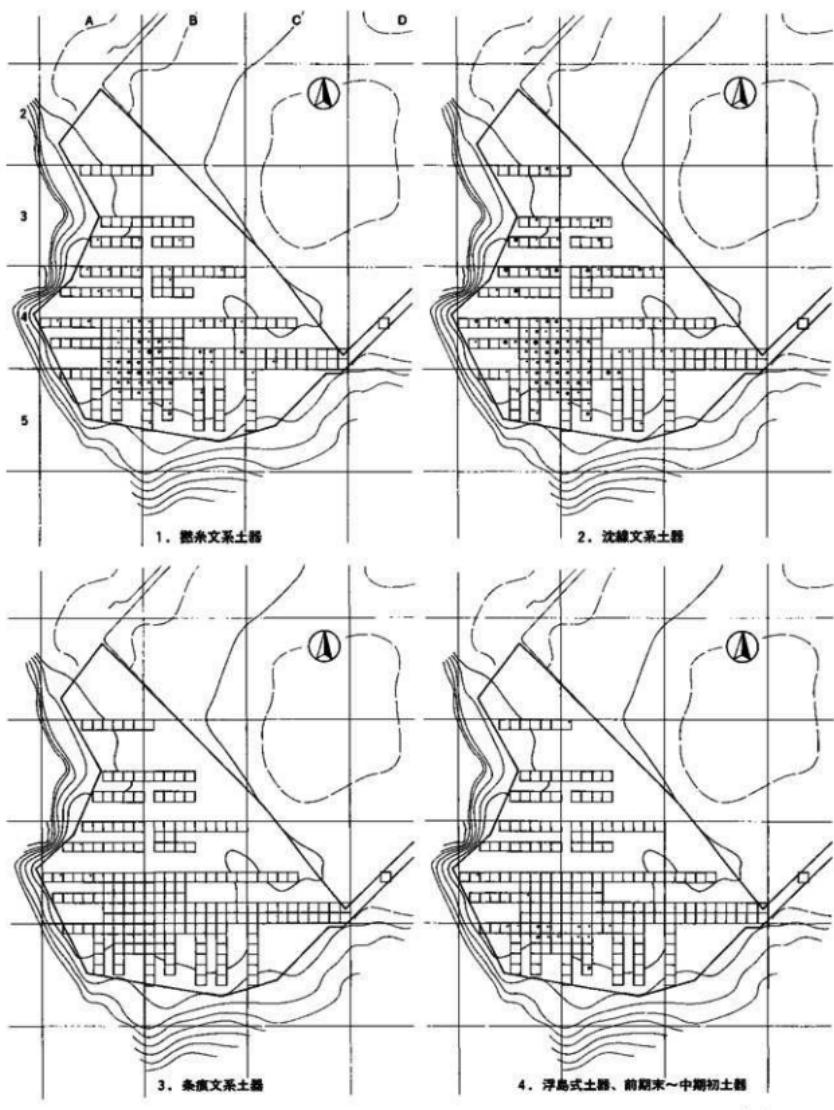
第IV群土器 調査区南西部で、南側の浅谷沿いに少量出土した。

第2表 出土土器比率

	2B	3B	4B	2C	3C	4C	3D	4D	4E	表探	合計	比率
I 撥糸文系	5	84	79	2	108	100	1	3		2	384	29.2%
II 沈線文系	59	440	87	27	100	134	1	5	1	5	859	65.3%
沈 線	22	203	27	16	41	44		1			354	26.9%
条 痕	1	96	5	2	24	52		4		2	106	14.1%
無 文	36	141	55	9	35	38	1		1	3	319	24.3%
III 条痕文系		4									4	0.3%
IV 前期以降		5	33	3		27					68	5.2%
合 計	64	533	199	32	208	261	2	8	1	7	1315	100%



第7図 出土土器比率グラフ



- 1 ~ 5
- 6 ~ 10
- 11 ~ 20
- 21 ~ 40
- 41 ~

第8図 出土土器分布状況

B 各群の土器

この項では各群土器を具体的に説明する。土器断面図内に■と●印が付されたものがあるが、■印は胎土に長石・石英礫を多量に含むもの、●印は纖維を含むことを示す。

第Ⅰ群土器

a 縄文施文のもの（第9・10図、図版5）

(1~9) 井草式に特徴的な、端部で極端に屈曲する口縁をなす。口縁部に横位文様帯を持ち、口唇部に施文を有するもので、井草Ⅰ式である。

1は口縁部文様帯に複数条の押圧縄文を持つもので、下位は縦縄文になりそうである。口縁部上端は無文帯となっている。口唇部には押圧縄文と斜縄文で2段施文されている。内面は磨かれている。

2~3は口縁部に横縄文を持つ。口唇部のあるものでは、斜縄文の2段施文である。胴部は縦縄文になる。

(10~15) 口唇部に施文を持つ。口縁部は縦縄文施文である。井草Ⅱ式に含まれる。

10は口唇部に2段施文されている。11~15の口唇部は斜縄文の1段施文であり、口縁部端部での屈曲はⅠ式ほどではなく、肥厚する程度のものである。13は内面にケズリ痕を残す。

(16~27) 口唇部に文様を持たない。口縁部は肥厚する程度で、結果的に軽い屈曲を見せる。胴部文様は斜縄文である。夏島式が主体である。

14~17、21は内面にケズリ痕が残されている。22~24は口唇部から内面を平滑になでている。稻荷台式的なものである。

(27~44) 縄文施文の胴部である。

27~37はRL縦縄文。38はRL縦位の斜縄文、39はLR縦縄文、40~44は無節Rの斜縄文をもつ。

b 摺糸文施文のもの（第10・11図、図版6）

45は小型品で、外面に細かいRの摺糸文が縦に施文される。口唇部にも摺糸文が施文されるが、上面に加え、外側の縁にも施文されているので、2段の施文ということになる。器形は角頭気味で肥厚しない。縄文での井草Ⅱ式に相当する。46は縦条体の条痕になる部位がある。口唇部外縁にも縦施文され、なで消され気味であるが、口唇部施文を意識しているのか。内面ケズリ痕を残す。

47~54は口唇部が無施文で、外面はR摺糸文の縦施文である。47~50は内面にケズリ痕を残す。

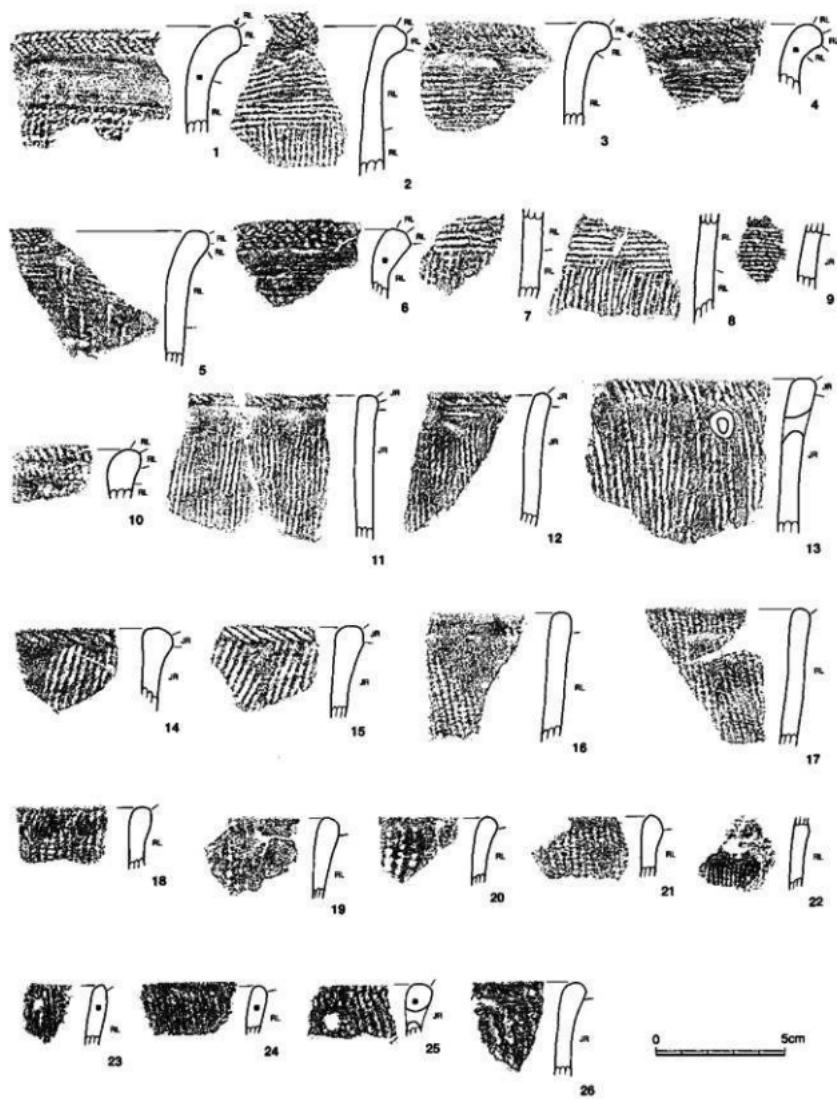
55~73は縦ないし縦斜方向に施文された胴部である。55では方向を変えて斜交差させている。56には内面にケズリ痕が見られる。59は49の胴部、60は胴下半の部位である。62・63は同一個体である。64は施文後なでられて文様が不明瞭である。70~73は底部付近のものである。71はLの摺糸文かあるいは無節縄文か。72・73はV字気味に施文されている。

74は尖底の端部である。

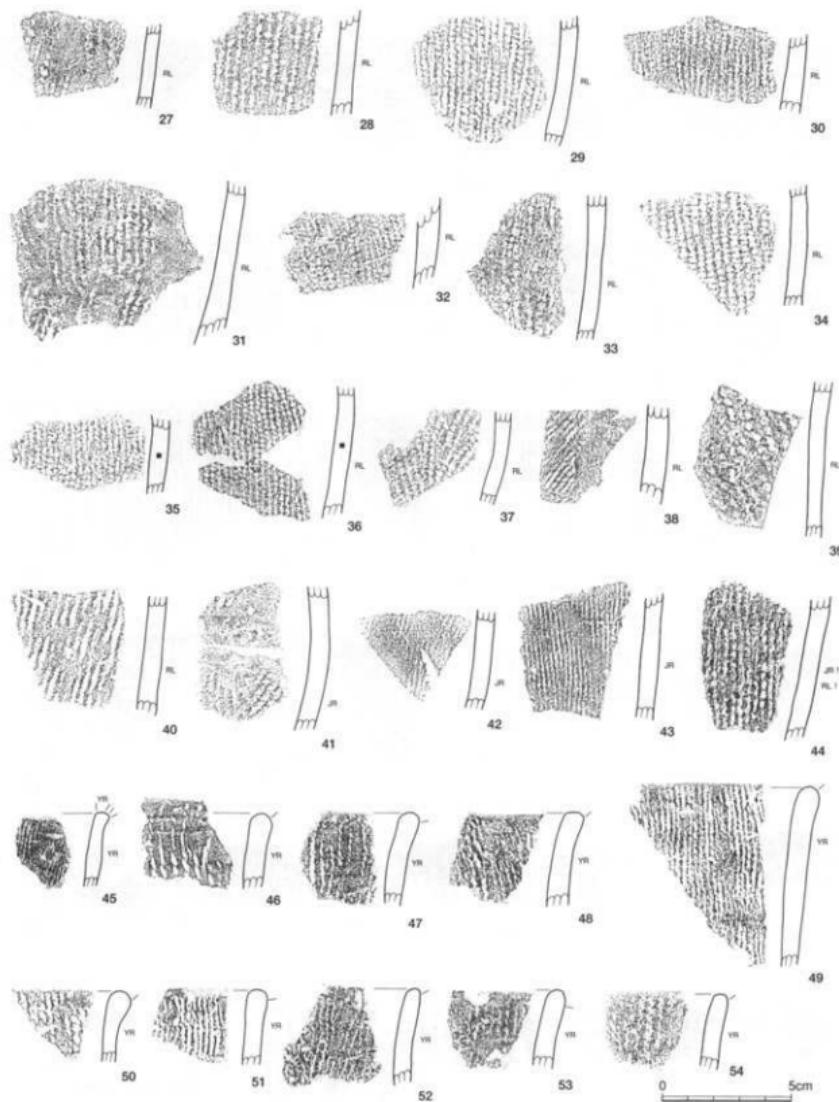
c 文様不明・特殊施文のもの（第11図、図版6）

75は口唇部に斜沈線を持つ。

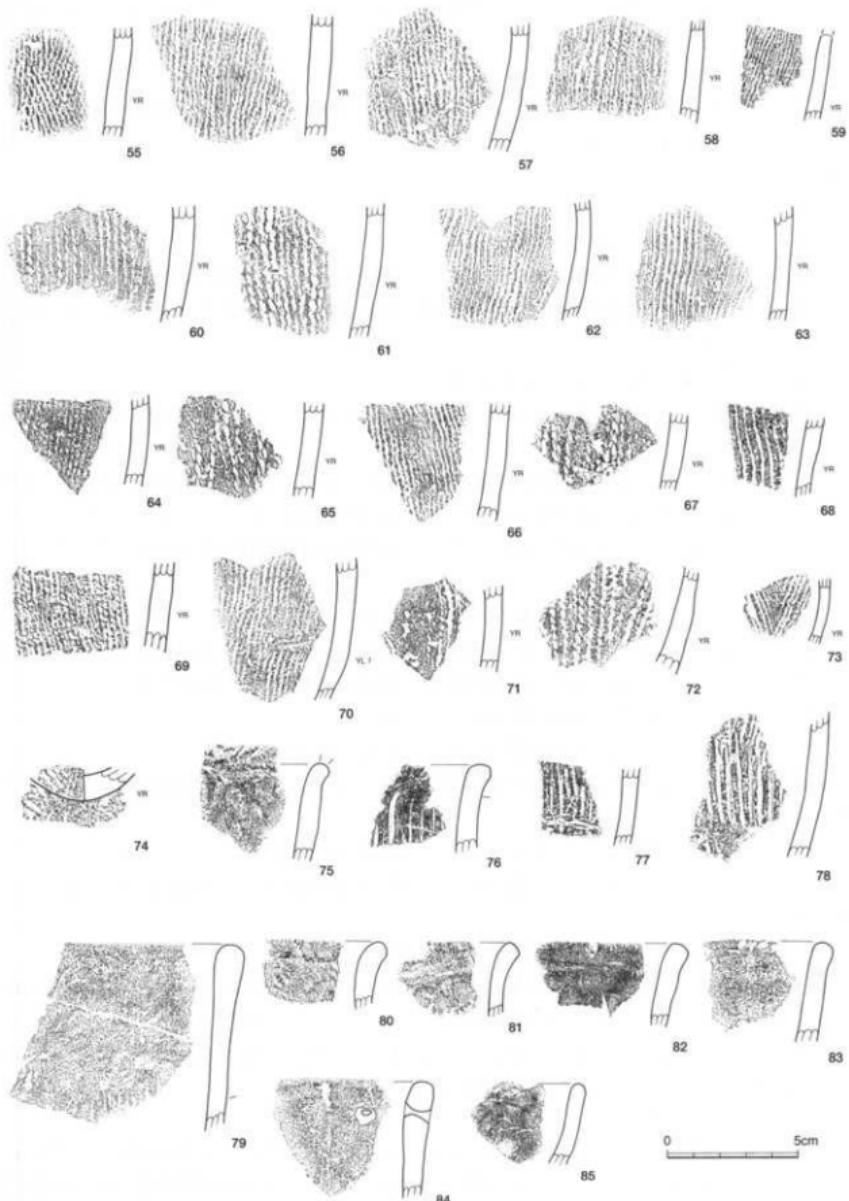
76~78は縦条体を引きずっとみられる条痕を持つ。76の口縁は端部でやや肥厚しており、井草Ⅱ式のものに類似している。小破片なので口唇部施文は確認不能である。内面ケズリが残る。77は一部横位施文されている。



第9図 出土土器 (1)



第10図 出土土器（2）



第11図 出土土器（3）

79の口唇部は円頭で肥厚する。破片の下位に撲糸文あるいは条痕文が施されているが、上部は無文である。稻荷台式であろう。

d 無文のもの（第11図、図版6）

80・81は口縁端部で屈曲している。83は口縁端部が肥厚し、内面ケズリを持つ。84は肥厚する口縁部で、79に似ている。85は小型のものである。

第II群土器

a 細沈線文主体のもの（第12図、図版7、8）

1は口縁部上部に横の条線を地紋として、鋸齒状の条線文を施文する。内削ぎ口唇である。

2は内削ぎの口唇で、口縁部上端に角押し状の幅広連續刺突文、横位条線で区切った口縁部文様帯には鋸齒状条線文を施している。

3は斜行平行沈線、斜梯子状沈線が交差して施文されている。

4は内削ぎ口唇で、口唇外縁部に刻み目を持ち、口縁部上端は横位条線文、以下の横位文様帯内は斜沈線を施文している。

5～8は沈線とともに連續刺突文を密に施文する文様がみられる。文様帯は横位の条線で区切られる。5は内削ぎ口唇で、斜施文、6は斜施文と刺突文単独で、横位帯状施文している。7・8は斜位、横位の施文である。9～11は横位帯状施文である。なお5～9は細かな白色礫を胎土に含み同一個体かも知れない。

12は連続短刻線が、横区切りの条線文に添えて施されている。

13は鋸齒状条線が施文されている。14・15は格子目条線のみられるもので、14は口縁部上端に横位条線で区切られる。外削ぎの口唇である。15は角頭口唇で、内面にかけてミガキが顯著である。

16は口縁部上端に斜行条線、下位に横区切りの条線を持つ。

17は角頭口唇を持ち、口縁部上端に縱位・斜行の条線が施文されている。

18は横位鋸齒状沈線、19は短刻線を伴う縱位鋸齒状沈線がみられる。両者とも横位の区切り沈線が伴う。20・21は格子目沈線文の胴部である。

22は縱条線文を持つ口縁部片で、角頭の口唇部には斜条線文がみられる。

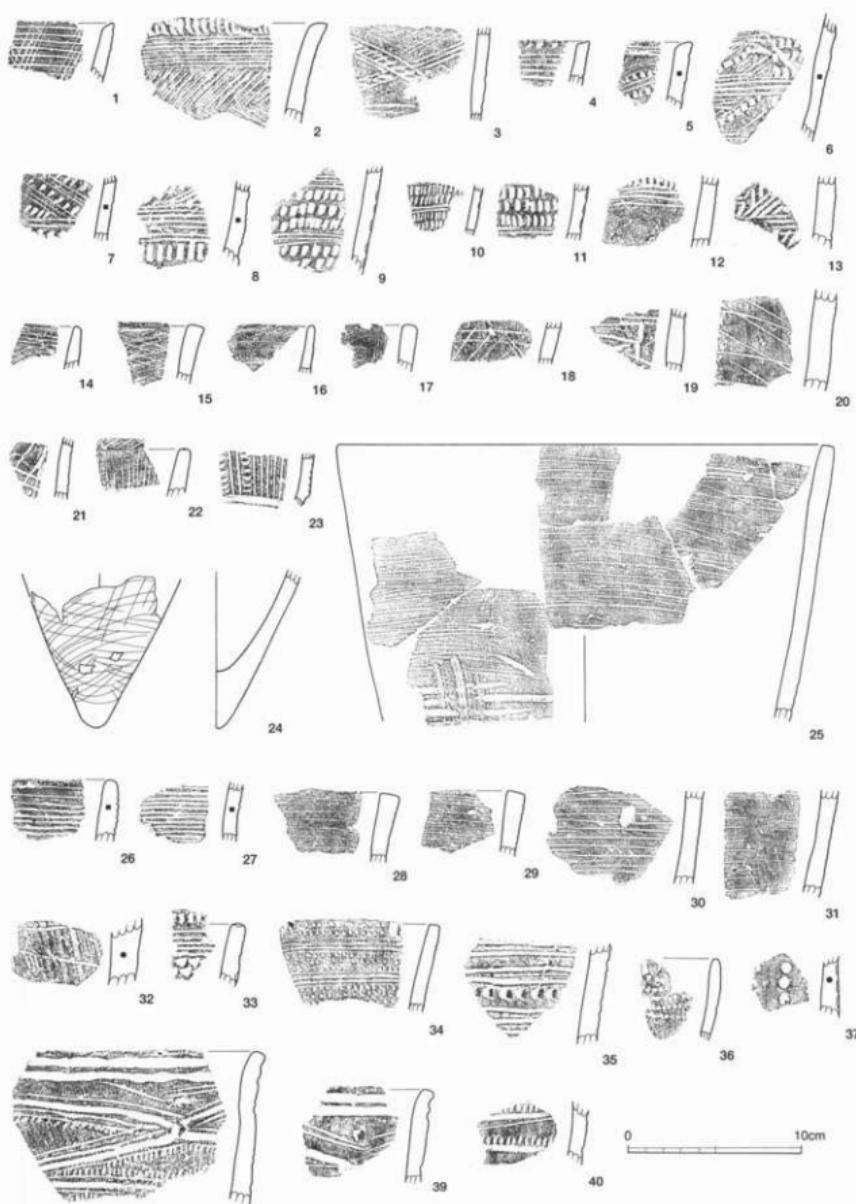
23は縱条線、連續爪形文を伴うもので、下位が太沈線で区切られている。内面は縱ミガキされている。胴下半のものだろう。

24は弧状の細条線が交差して施文されている。円錐形の尖底部である。

25～31は横条線のみを施文されたものである。25は口径28.9cm、角頭口唇で、わずかに外傾し直線的に立ち上がる口縁をなす。下半部は横太沈線条線が施文されている。全面が磨かれており、外面はその上に条線が施文されている。26は口唇部は円頭で、内面はミガキが入る。胎土は白色礫の入るものである。28・29は角頭口唇部で、同一個体である。器面のミガキは顯著である。

32は横位沈線がみられる。

33～37は刺突文を伴う。33は横位条線間に連續刺突文が帶状に施文される。刺突文は角棒状工具を寝せながら先端の角を押捺している。口唇部には連續刺突文が付されている。34は横位条線の間に尖頭形工具による連續刺突文が帶状施文される。この刺突文は33のものと同様に押捺手法による。角頭口唇で、内面



第12図 出土土器 (4)

はよく磨かれている。35は沈線間に爪形刺突文がみられる。36は径6cmほどの小型品で、上部に細い竹管の帶状連続刺突文、下半部に斜沈線が施されている。器面調整は粗雑である。37は丸棒状工具による連続刺突文が縦位に施されている。

38~40は太沈線と細沈線が組み合わされる文様が特徴的である。口縁部上端がややくびれる、口縁部直下の太沈線以下に、横長の菱形文様を連続刺突文を伴って形成している。

b 貝殻腹縁文をもつもの（第13図、図版8）

41は鋸歯状条線が配されている。横位条線に腹縁文を添えている。

42~51は横位文様帯に斜行沈線文を施し、腹縁文を加えている。42~44は、斜行沈線間にも腹縁文が加えられている。45~50は二本組斜行沈線、51は3本組沈線で区切った区画内を腹縁文を充填している。

52・53は口縁上部に横位条線が施されるもので、下位に腹縁文もち、口唇部に刻み目がみられる。同一個体である。

54は全面に横位腹縁文が施文されている。

c 太沈線文主体のもの（第13図、図版8）

55は波形の突起部で、口縁に縦条線を持つ。56・57は口縁部上端に縦条線、以下に横条線が配されている。口唇部は内削ぎである。

58・59は口縁部上端に横条線、以下が斜条線施文のもので、口唇部は内削ぎ気味の角頭のものである。60は斜条線の下位に横条線文が施文されている胴部である。

61~63は横条線のみ施文の口縁部、64~66は横条線のみ施文の胴部である。61・62は口唇部が角頭、62・63は円頭である。

67~69は胎土に白色礫がめだつ。67は沈線の幅は広く浅いもので、沈（条）線文というより、凹線文といふべきであろう。円頭口唇部で、内面までなでられている。68・69は横位施文であり、外面に礫が現れている。

70は縦条線、71・72は斜条線、73~75は縦鋸歯状条線、76は横条線施文の胴部片である。77・78は横条線施文の底部近のものである。

79は上部に斜沈線を持つ底部で、尖端部を欠いている。

d 条痕文をもつもの（第14図、図版9）

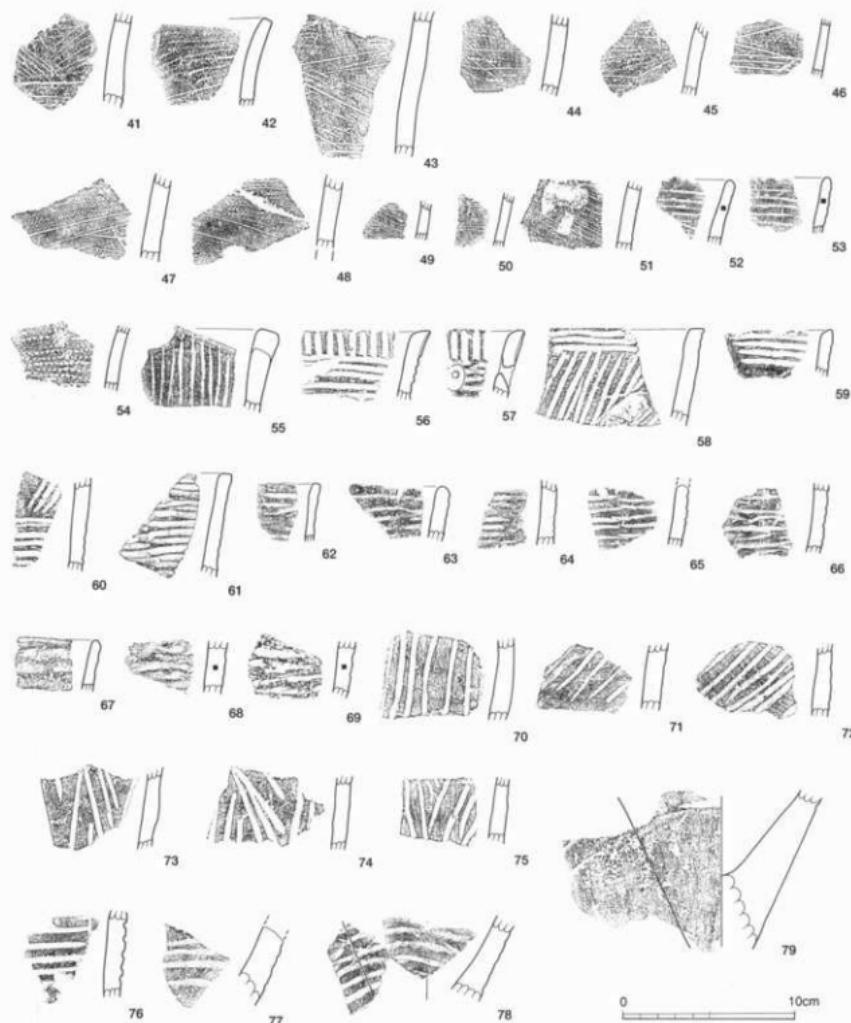
80は櫛歯状工具による斜格子条線文が見られる。口唇部は内削ぎで、外縁に刻み目がめぐる。内面は上端が凹帯をなし、外縁の稜を強調している。

81~84は条間が開いた格子目貝殻条痕文が施文されている。81~83は同一個体であろう。84は小振りで内面に縦のケズリ痕が残る。

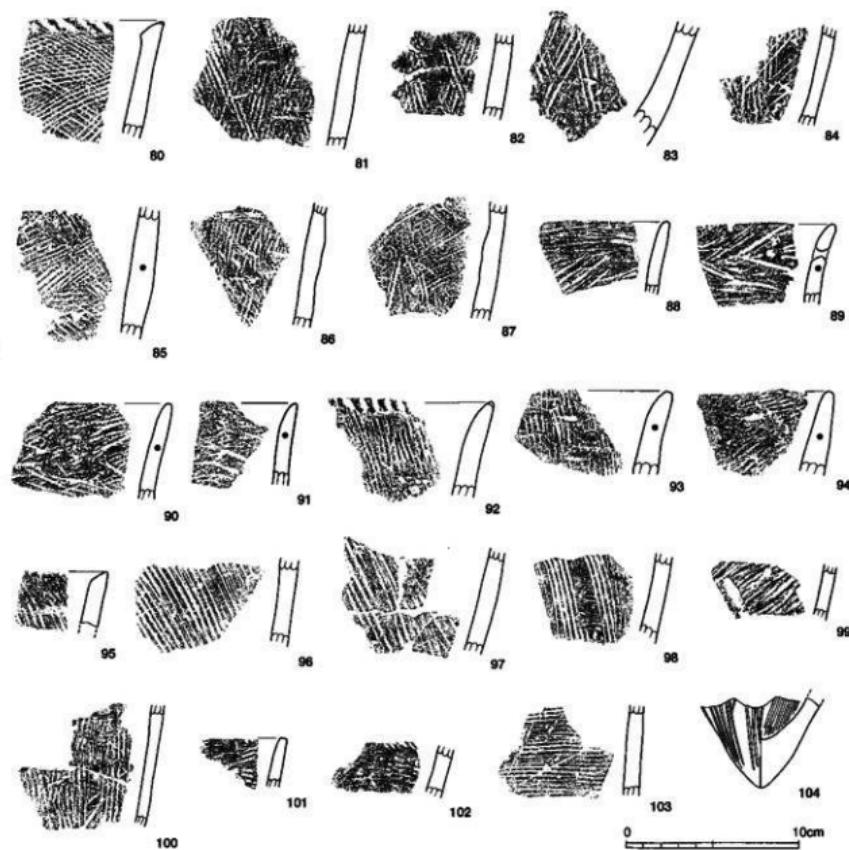
85~87は異方向の斜条痕文が交差して施文されている。

88は口縁部が内削ぎ気味で、上端は横位、以下斜条痕文がみられる。

89~91は内削ぎ気味の口縁部で、横位羽状施文。同一個体と思われる。胎土にわずかに纖維を含む。内面に横ケズリ痕がみられる。



第13図 出土土器 (5)



第14図 出土土器（6）

92～99は斜条痕の施文されたものである。92は内削ぎで、刻み目を持つ。93・94も内削ぎ尖頭気味のものである。95は内削ぎ口縁である。96・98は内面にケズリ痕がある。

100は縦条痕文がみられる。条痕が内面にも若干残されている。

101～103は横方向の条痕が見られる。101・102は同一のもので、鋭い横沈線が付されているが、文様であるか不明。口唇は角頭で、薄い。斜条痕の見られる部位もある。

104は縦条痕文の施文された尖底部である。調整や厚さは84が最も似ている。上部は各方向からの条痕が交差して、鋸歯状か格子目の施文になるかも知れない。

e 無文のもの（第15図、図版10）

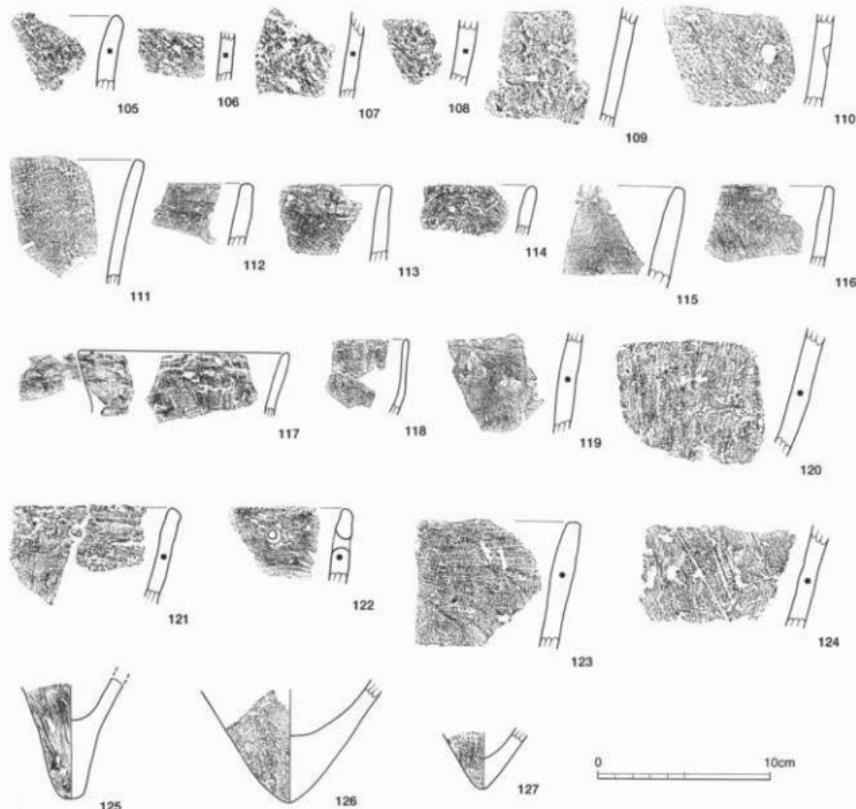
沈線文系土器の無文のものである。

105～108は白色礫混じりの胎土で、外面ケズリ調整で、礫粒の動いたあとが残る削痕文がみられるものである。105はやや外反する口縁部で、外削ぎ気味の口唇である。

109は外面に器面をヘラでなでつけた痕が残る。白色礫混じりの胎土で、内面に継ミガキが施されている。

110～115は外面にケズリ痕がみられる。110は外面斜方向、1箇所に丸棒状のもので斜めからの刺突痕がみられる。胎土には多量の細砂を含む。111～115は円頭の口唇部をなす。111は斜削り痕がみられる口縁部で、内面はよく磨かれている。

116～118は胎土に纖維を含まない。円頭口唇をなす。116は内外面のミガキが顕著である。117は口径



第15図 出土土器 (7)

12.4cmで、内外面にまばらにミガキがなされている。118は直径 6 cmほどの小型品である。

119・120は胎土に纖維を含む胴部片で、119は内外面のミガキが顕著である。120は纖維はわずかで、外面に縦のハケ目痕がある。

121・122は纖維を胎土に含む口縁部で、口唇部は外削ぎ状である。調整は粗雑である。

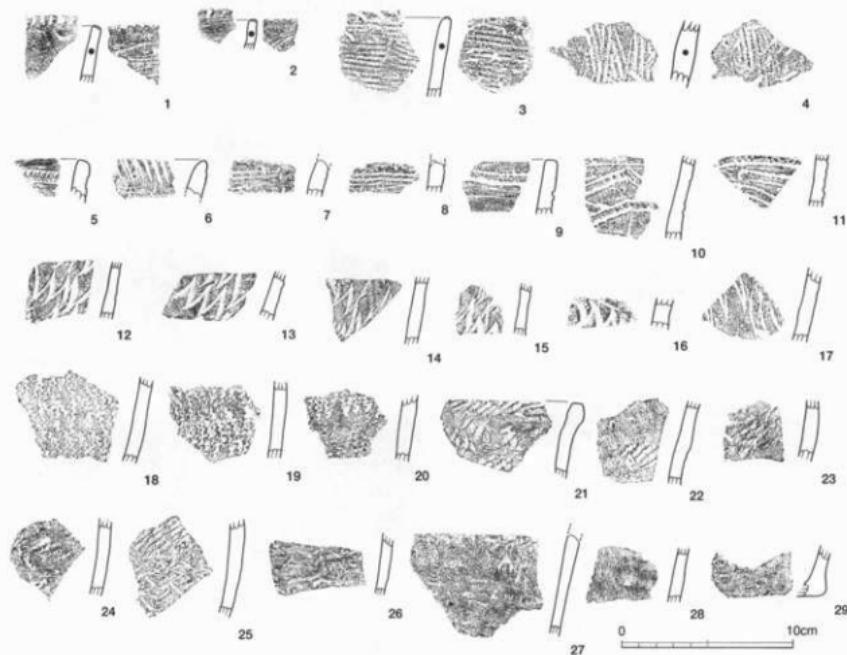
123・124は内外面ケズリ痕を持つ。123の口唇部は角頭をなす。

125は無文底部で端部が突出する。外面に縦ナテが残されている。116のものに近似する。126・127は円錐形をなす無文底部である。

第Ⅲ群土器（第16図、図版11）

1・2は口唇に刻み目状の連続刺突文が施された口縁部で、内外面に擦痕が施され、胎土に若干纖維を含む。子母口式土器である。

3・4は内外面に貝殻条痕文が施文される。3は条痕が横方向であり、口唇部上面に斜めの刻み目がみられる。4は底部に近い破片である。両者とも胎土に纖維を含む。広義の茅山式土器である。



第16図 出土土器（8）

第IV群土器（第16図、図版11）

5は変形爪形文を施文された口縁部で、口唇が円頭になでられ、内面は磨かれている。浮島II式である。6は口縁部上端に継位短条線、以下に半截竹管の横位沈線が施される。口唇部は尖頭をなしている。接合部で水平に割れている。7・8は6の体部である。興津式土器とみられる。9~11は同一個体で、9は半截竹管の横位沈線、10は横位波状沈線、11は横位弧状線が施されている。浮島II式か諸磣b式土器である。

12~15は幅広の波状爪形文をもつもので内面が滑沢になでられている。地點的に9~11と同じで、胎土・調整が似ている。16・17は波状爪形文のものだが、内面に砂粒が浮き出す調整で、前者と別個体である。16では爪形の幅が狭く深い。17~20は有助の波状貝殻文を持つ。内面は滑沢にナデられている。これらは浮島式のものである。

21~23は無節の横位斜縫文の施文された個体で、内面に横ミガキがみられる。21の口縁部は端部で屈曲し円頭口唇をなし、撚糸文に似る。焼成がよく堅締で、風化が少ない。24は斜縫文と綾縫り文が併せ施文されている。25は綾縫り文がみられる。これらは同一個体で、前期末斜縫文のものであろう。

26は胴下半部のもので、上部に単節斜縫文が見られる。外面は風化が激しい。内面はよく磨かれている。27・28は無文の胴部である。29は無文平底で26と同一個体と思われる。これらは前期末のものかあるいは後期のものか、決め手を欠く。

（2）石器（第17図～19図、第3・4表、図版12・13）

縄文包含層から検出された石器について主なものを掲載した。

旧石器時代から縄文時代の移行期に位置づけられる尖頭器が3点検出された（1～3）。いずれも近接したグリッドから出土したものである。また周辺グリッドからも尖頭器製作に伴うポイントフレイクが数点検出されており（4・5），石器集中を形成していた可能性が高いが、残念ながらまとまった資料は得られていない。

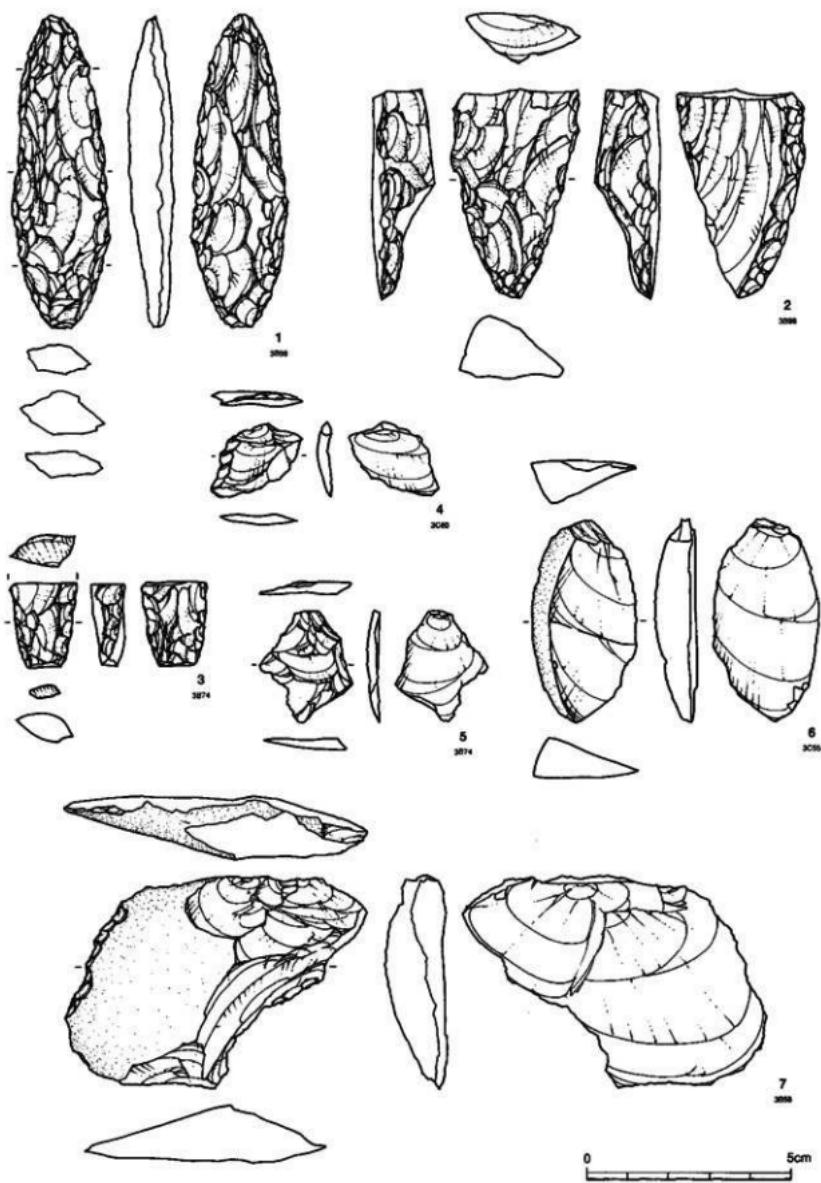
1は器体中央よりやや下半寄りに最大幅をもつ両面加工のもので、基部端は尖らず、丁寧な調整によって薄く仕上げられている。2は幅広な剥片を素材とし、背面を中心に調整を進めているが、器体整形中に中央付近から折れてしまったため廃棄されたと思われる。分厚く残っている背面側には自然面が残置するなど、整形途中のものであることを裏付けている。先端部・基部の判断は難しい。3は砂岩製の尖頭器片で、上下両端を節理面で欠損している。完形であれば棒状を呈した資料であったと思われる。3以外は1・2・4・5ともに安山岩を用いている。

比較的大型の剥片で、同様に安山岩製のものがあるが（6・7）。前述の尖頭器関係資料が比較的まとまる地点からは、やや離れた地点からの出土であるので同一時期のものであるかは疑問を残す。

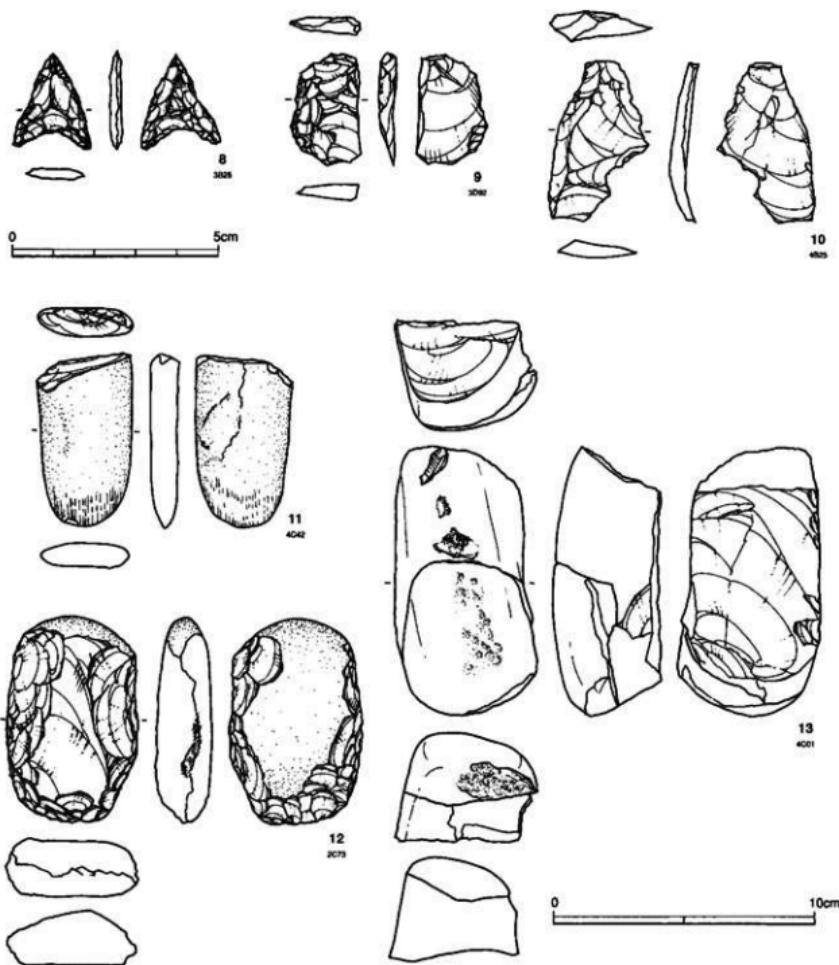
6は線状打面となり両極剥離による剥片生産を窺わせる。7の側縁には不揃いながら連續した急角度調整が観察されることから、調整痕のある剥片とした。

上記以外にも、縄文土器の包含層中から同時代に属する石器群が検出されている。

8はチャート製の石鏃である。基部に明瞭な抉りをもつ凹基のもので、側縁はやや外湾する。左側縁は発掘時のガジリにより変形している。



第17図 出土石器（1）



第18図 出土石器（2）

本遺跡からは、石器製作に伴う石器集中地点は検出されていない。主な剥片類は9・10の2点のみである。9は縦位に半削したもので、縁辺には微細な剥離痕が見られる。黒曜石製である。10はチャート製の剥片である。頭部は折れて欠損している。

砾石器についても質量ともに貧弱ではあるが、いくつか紹介しよう。

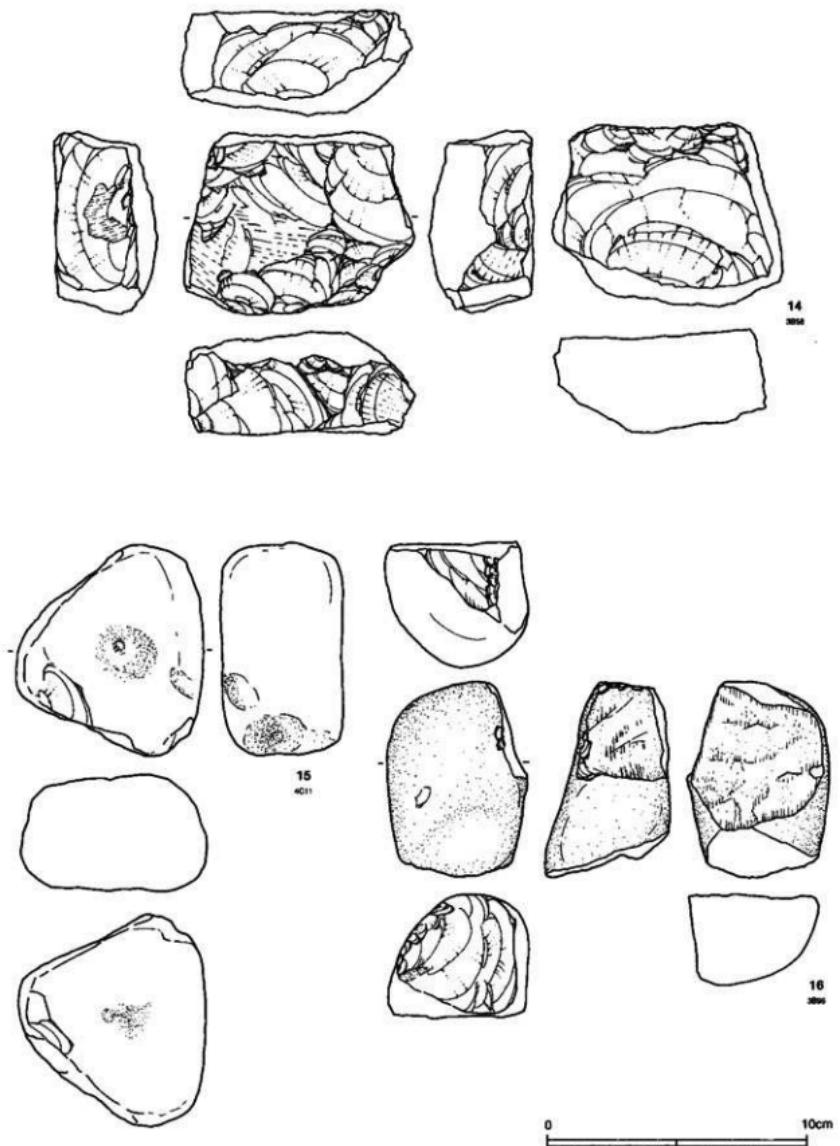
11は扁平梢円縫を用いた磨製石斧で、研磨は刃部のみに施されている。12は扁平梢円縫を用いて刃部と側縁に調整を加えて整形したもので、いわゆる疊斧である。側縁はかなりすれた状態で明瞭な稜を形成していない。

13は柱状の疊端部を中心に敲打痕が観察される蔽石である。14は直方体状を呈し、一部の稜に敲打によるものと思われる「潰れ」が観察される。また、敲打に伴う剥離痕も顕著である。15は石皿片と思われるが作業面の凹みは顕著ではない。石皿分割後、四石として用いられ平坦面中央には敲打による凹みが、両面に見られる。16は14と同じように潰れた分割面の稜をもつ資料である。分割面には使用によると思われる磨痕が顕著であるが、水磨によるものである可能性も否定できない。

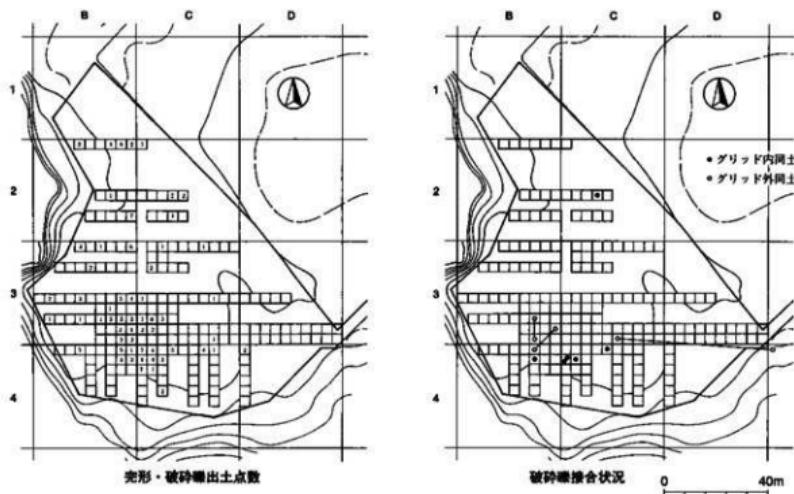
また疊・疊片が145点検出されている。各グリッド数点単位で検出され、まとまった分布状況を示しているとは言い難い（第20図）。被熱により赤化した破碎疊が多く、本来的には疊群として機能していたものと思われる。なかには、10m～80m近く離れたグリッドから出土した破碎疊が接合している例もあるが、全体的に接合率は低いと言えよう。石材はチャートを主体として流紋岩・砂岩が加わり、花崗岩・ホルンフェルス・安山岩等が伴う（第4表）。石材構成は周辺遺跡における状況と特に変わらないようである。

第3表 出土石器観察表

検出No.	グリッド	遺物No.	器種	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	備 考
1	3B96	3	尖頭器	安山岩	75.9	24.0	11.3	21.07	
2	3B89	4	尖頭器	安山岩	52.4	30.9	15.5	22.22	上半部欠損
3	3B74	14	尖頭器	安山岩	20.8	16.9	8.1	3.14	上下端部欠損
4	3C80	1	剥片	安山岩	18.6	21.1	3.0	0.82	ポイントフレイク
5	3B74	1	剥片	安山岩	26.8	22.1	3.2	1.60	ポイントフレイク
6	3C55	1	剥片	安山岩	49.1	25.2	9.6	11.45	
7	3B58	2	調整痕のある剥片	安山岩	53.2	75.5	16.0	48.83	
8	3B25	12	石礫	チャート	22.5	18.5	3.3	1.11	
9	3D92	2	調整痕のある剥片	黒曜石	26.6	16.7	4.1	1.80	
10	4B25	1	剥片	チャート	39.6	21.8	5.5	2.40	
11	4C42	2	磨製石斧	砂岩	53.7	36.7	11.2	43.87	刃部磨製
12	2C73	1	打製石斧	ホルンフェルス	79.2	50.9	22.4	134.15	
13	4C01	6+2	敲石	ホルンフェルス	103.4	54.5	41.7	323.54	
14	3B58	4	敲石	砂岩	70.5	88.6	40.1	370.07	
15	4C11	-	石皿	安山岩	82.6	73.2	46.4	339.47	
16	3B96	3	敲石	砂岩	75.5	55.5	47.9	238.55	



第19図 出土石器（3）

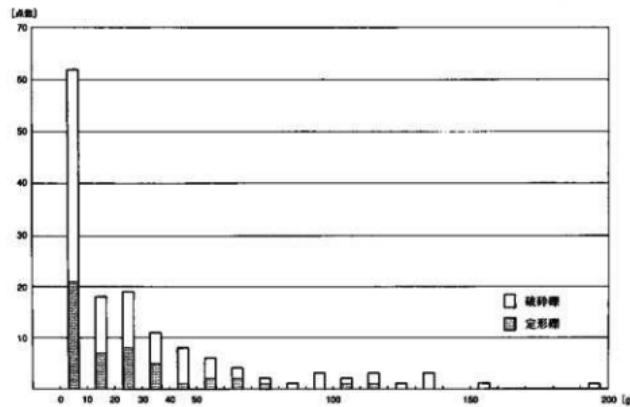


第20図 磚グリッド別出土状況

第4表 磚石材構成

	チャート	流紋岩	砂岩	花崗岩	ホルン	安山岩	軽石	その他	合計	比率
完形磚	30	7	1	4				7	49	33.79
	743.84	112.99	9.23	119.77				183.91	1169.74	27.22
破碎磚	32	22	22	1	6	5	1	7	96	66.21
	266.63	1028.9	1108.4	55.84	194.13	268.92	2.79	202.37	3128.21	72.78
合計	62	29	23	5	6	5	1	14	145	100
	1010.7	1141.9	1117.7	175.61	194.13	268.92	2.79	386.28	4297.95	100
比率	42.76	20.00	15.86	3.45	4.14	3.45	0.69	9.66	100	
	23.52	26.57	26.00	4.09	4.52	6.26	0.06	8.99	100	

〔上段：点数、下段：重量〕



第21図 磚重量ヒストグラム

第2節 中・近世以降

1 遺構

検出された遺構は炭焼土坑が1基である。

003号跡（第6図、図版4）

本調査区内の4C00グリッドに位置する。平面形は長軸1.93m、短軸1.48mの隅丸長方形である。検出面から底面までの深さは0.36mを測る。主軸方位は、N-81°-Wである。焼土・炭混じりの軟質な黒褐色土が覆土となっており、床面直上には薄く炭の層が検出され、また部分的に焼土がみられた。遺物は出土していないが、上部の覆土が表土に似ているので中・近世のものとしてよい。

第3章 まとめ

調査した区域では早期沈線文系土器を中心とした包含層が検出された。遺構は土坑1基とわずかだったが、遺構の存在する可能性の高い台地縁辺部の本調査は行っておらず、従って今回調査されていない区域に遺構が存在している可能性がある。

沈線文系土器で出土したのは三戸式と田戸下層式の土器である。無文、条痕文のものを含め、三戸式の方が出土量が多い。十余三船荷峰遺跡、十余三船荷峰西遺跡という三戸式の大きな遺跡が南側に分布しているが、これらを含めて三戸式の集中域の一角をなすといえる。早期撲糸文系土器では夏島式が中心で、井草式が加わっている。前期土器は少なかったが、浮島II式、斜繩文のものが得られている。その他の土器は、早期条痕文系土器がわずかに得られた程度である。

石器は草創期の柳葉形尖頭器の出土が特筆される。磨製石斧など早期の特徴的な石器も得られている。

調査が遺跡のごく一部であったが、遺跡の性格の一端をうかがい知れる成果が得られたといえる。

写 真 図 版



遺跡空撮写真（縮尺1/10,000）



遺跡近景（南から）



確認調査状況（道路部）



確認調査状況（東南から）



本調査区遺物出土状況（北から）



本調査区遺物出土状況（東から）



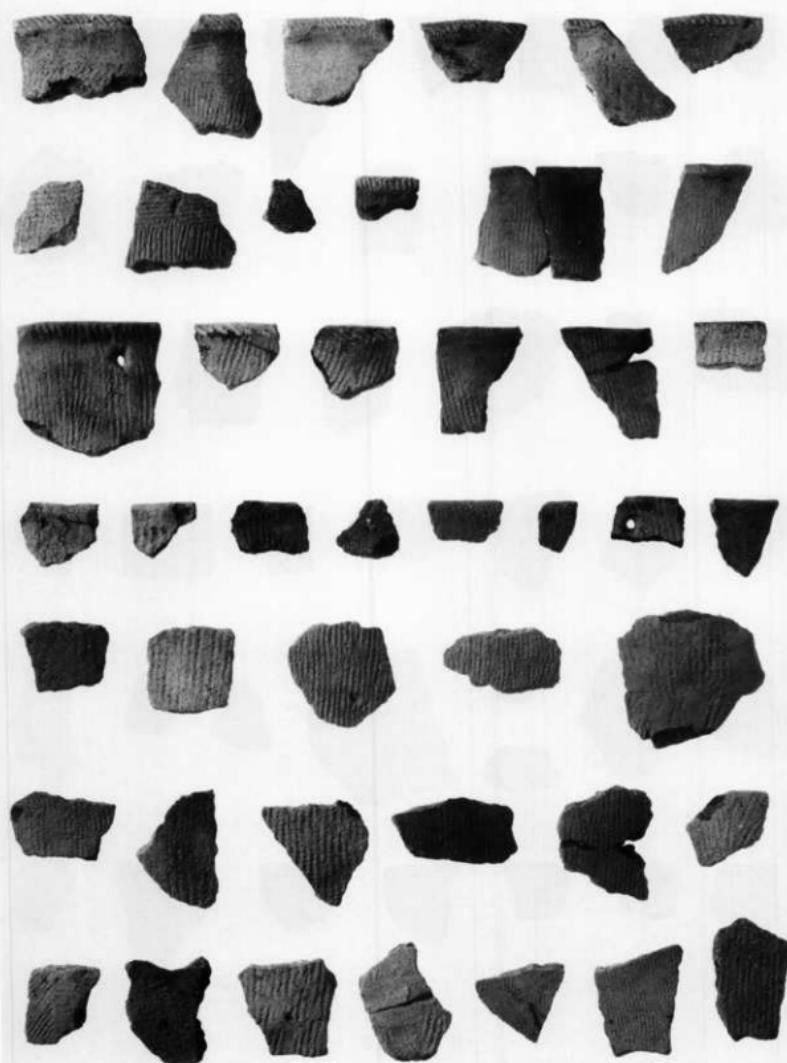
尖頭器出土状況



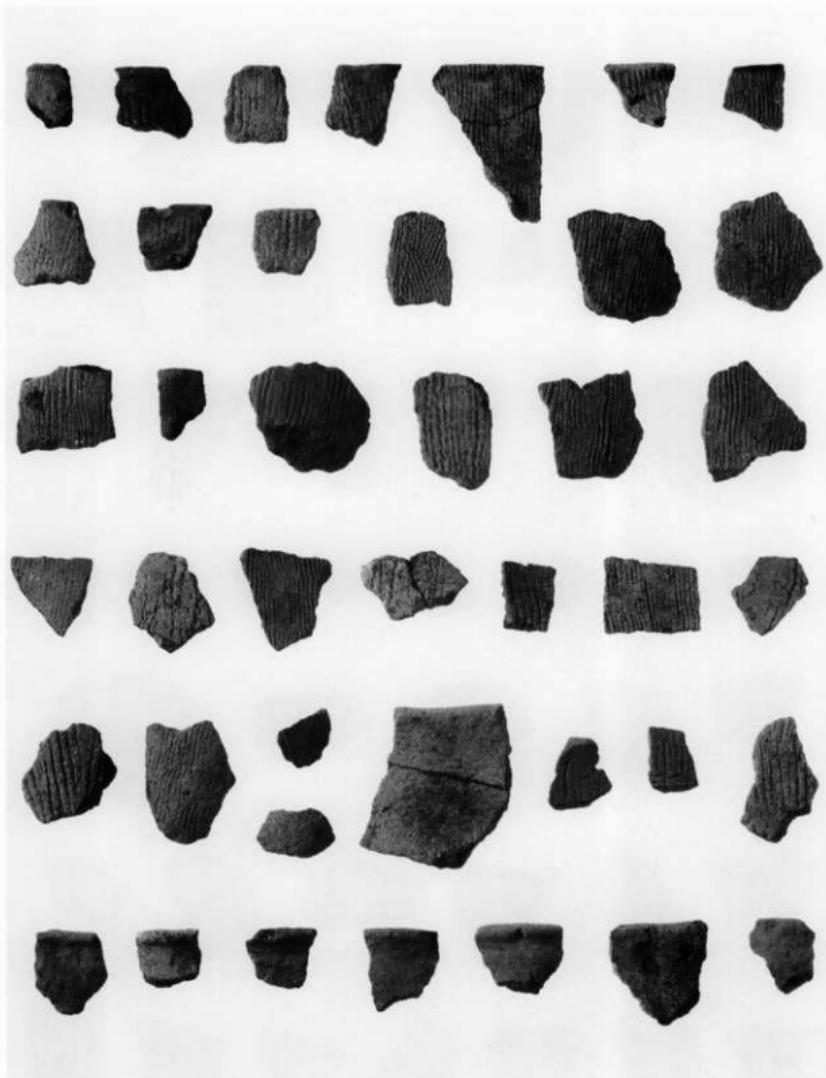
001号跡



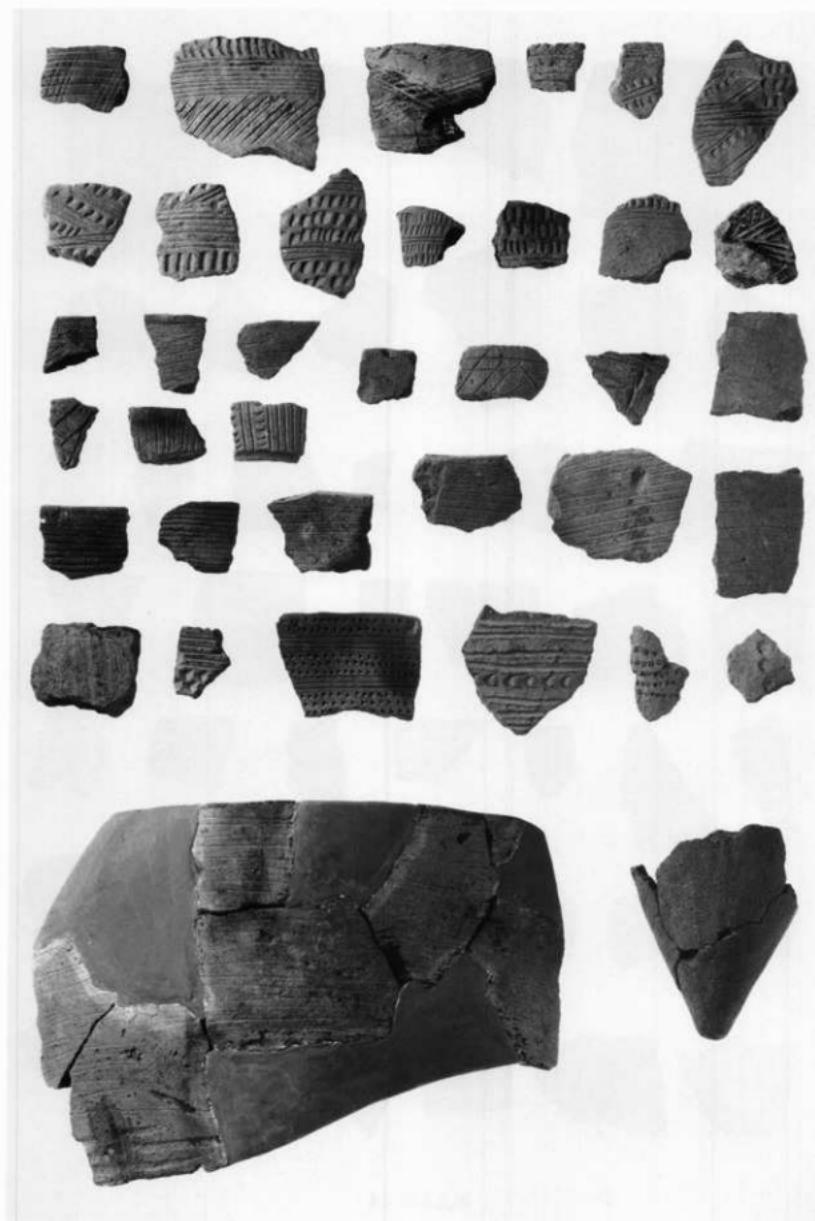
003号跡



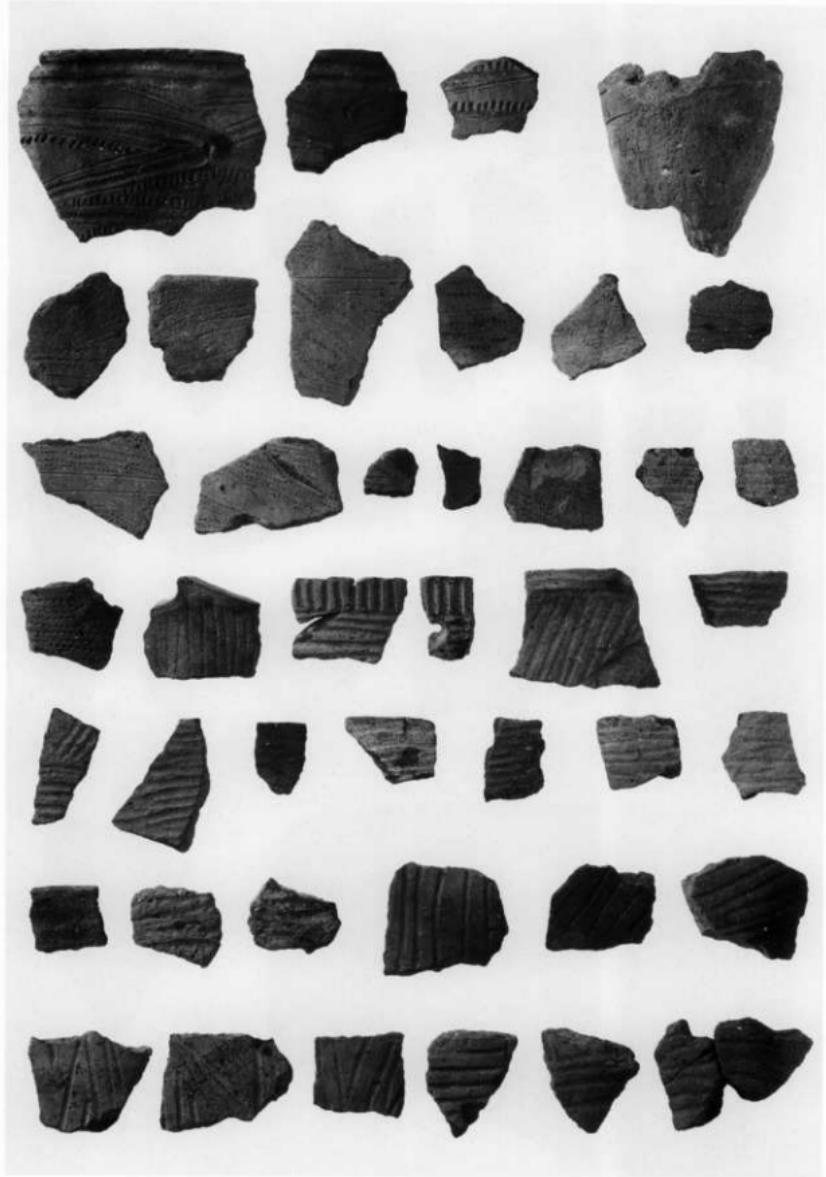
出土土器（1）



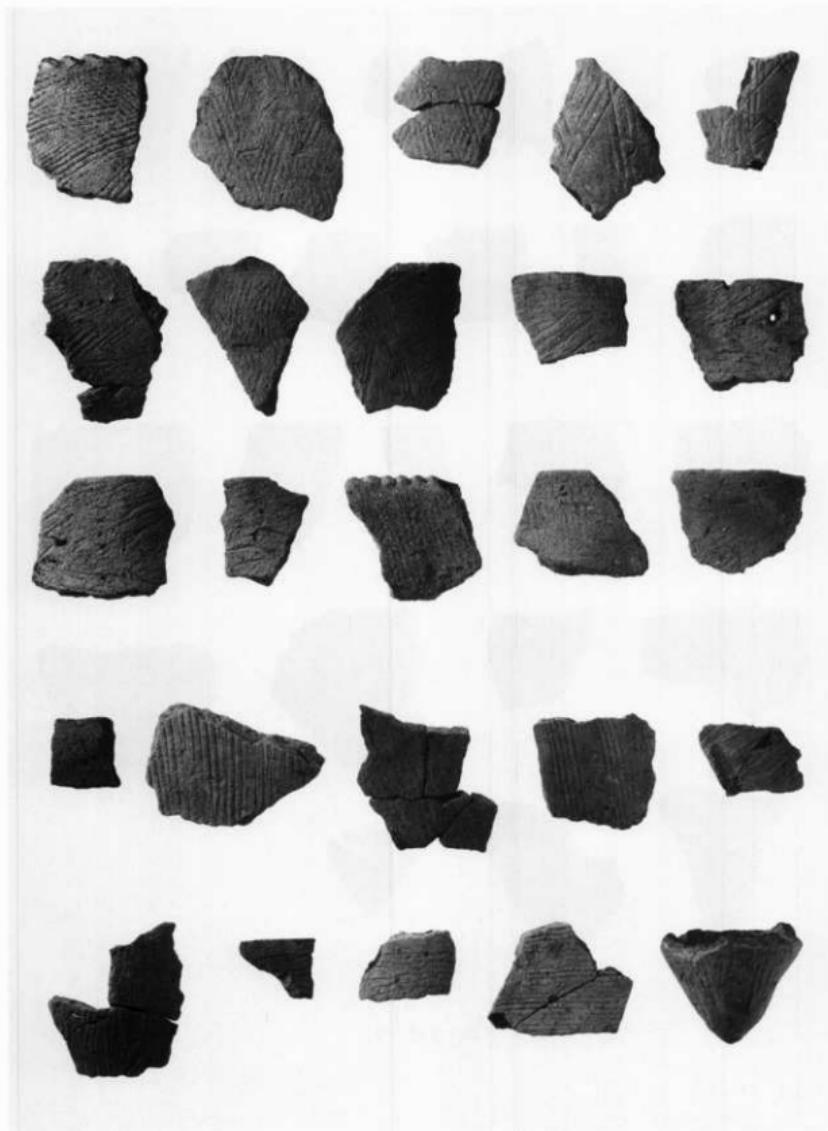
出土土器（2）



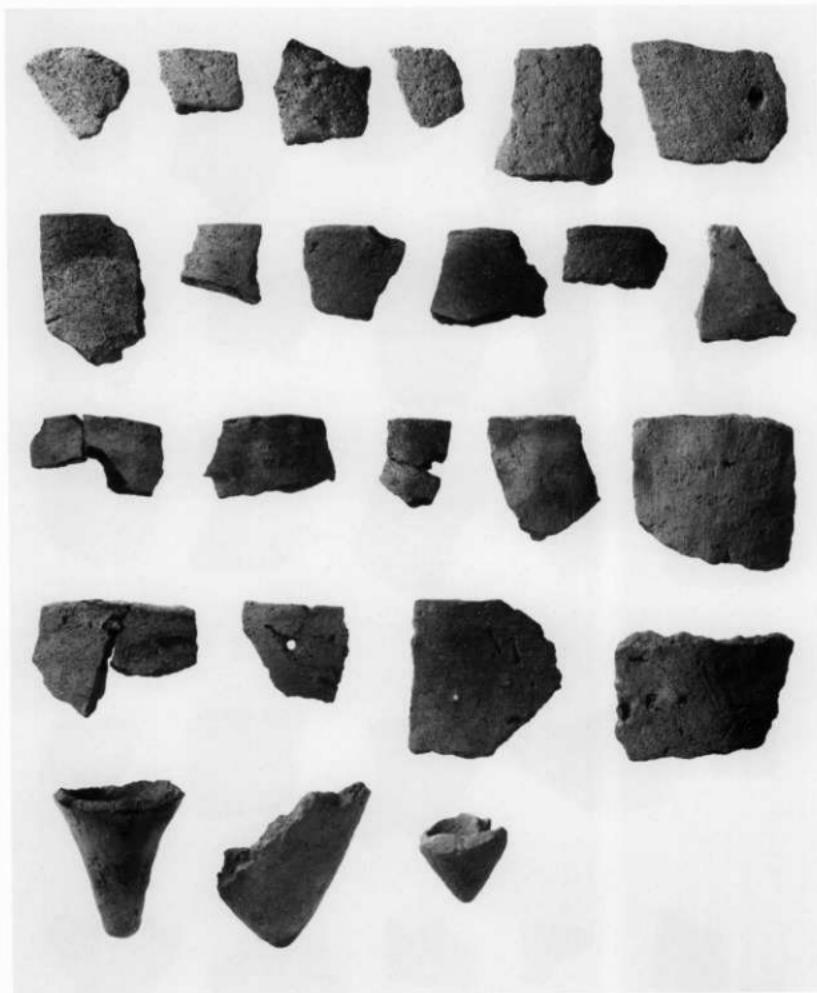
出土土器（3）



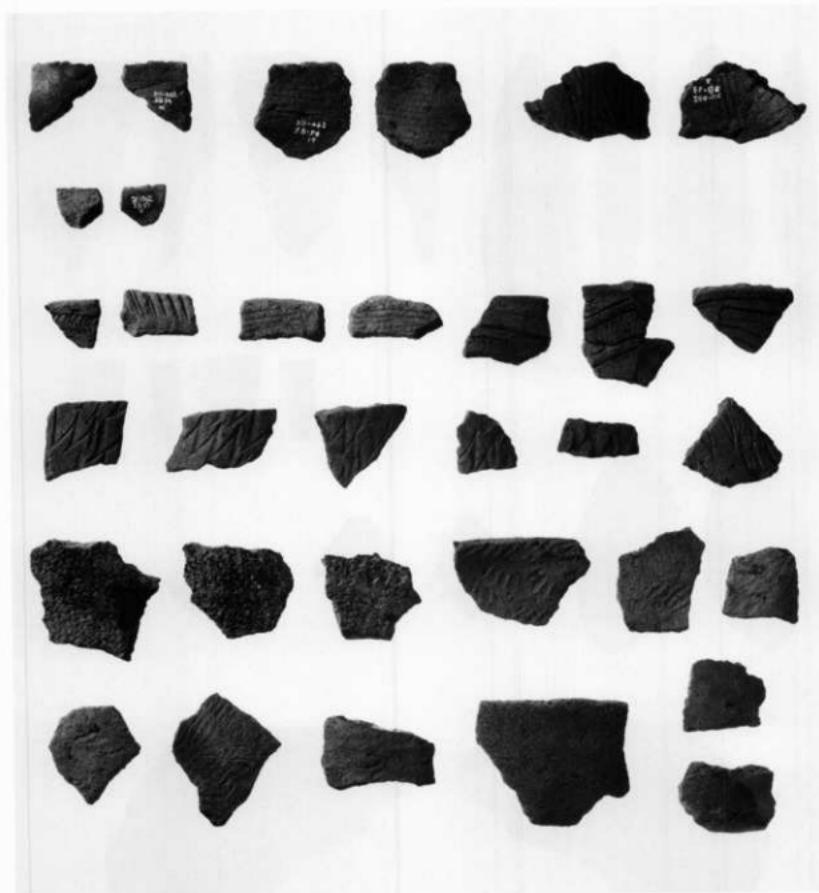
出土土器 (4)



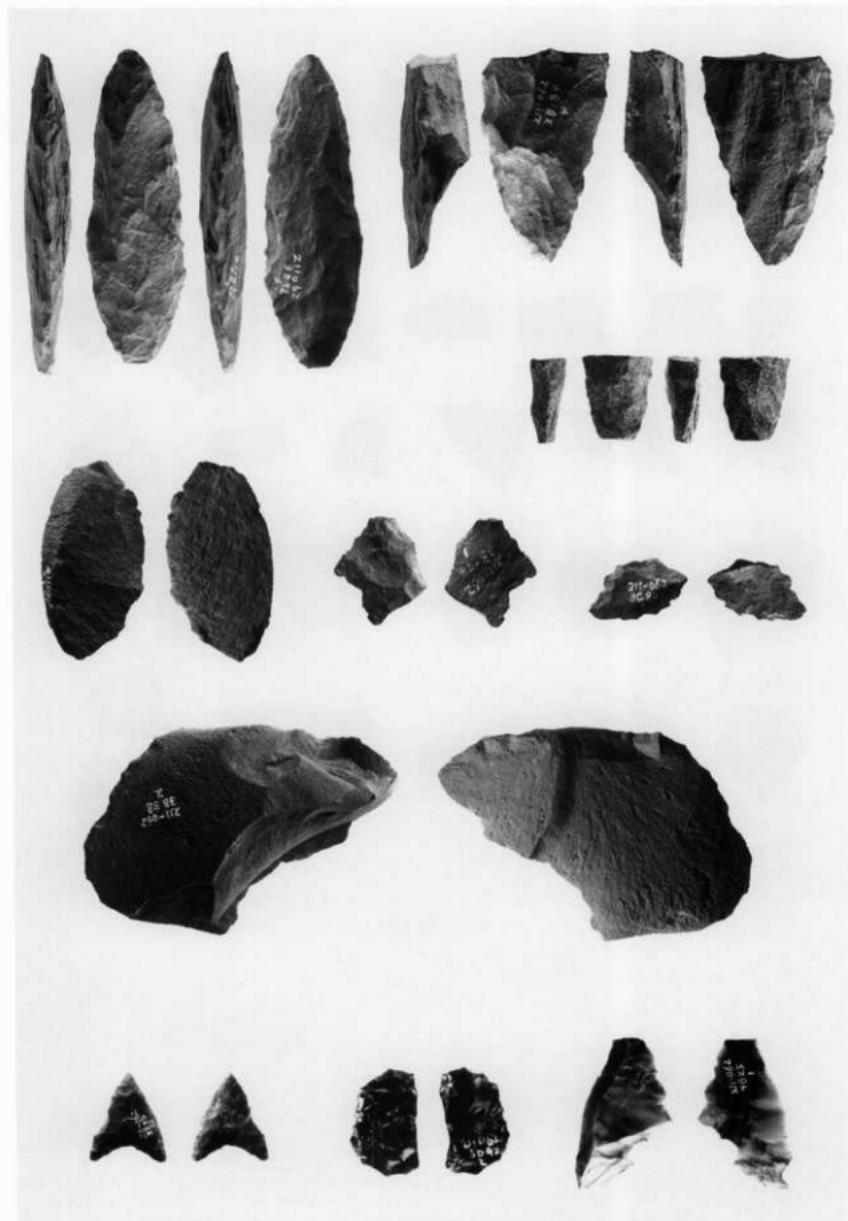
出土土器（5）



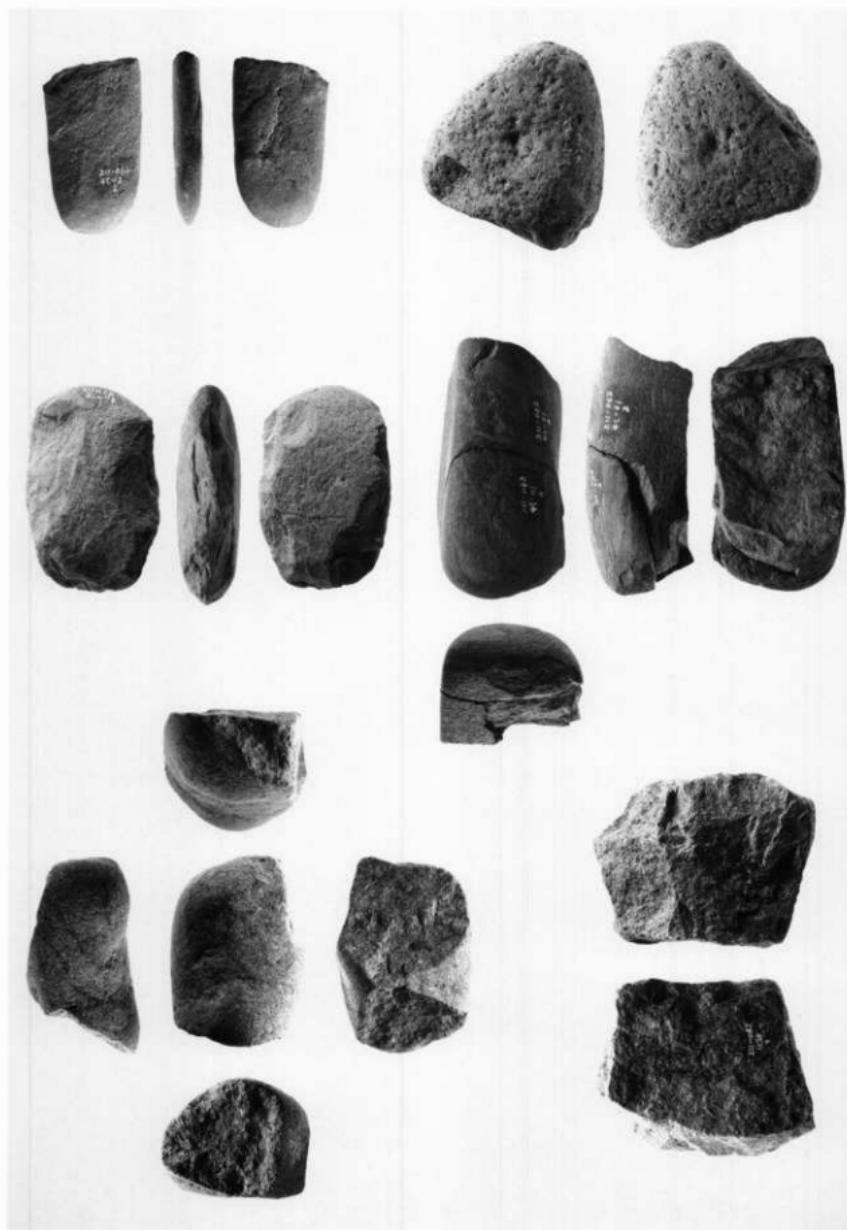
出土土器（6）



出土土器（7）



出土石器（1）



出土石器（2）

報告書抄録

ふりがな	なりたしとよみしほんぎにいせき
書名	成田市十余三四本木II遺跡
圖書名	航空無線施設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第425集
編著者名	宮 竜行、水塚俊司
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL043-422-8811
発行年月日	西暦 2002年3月25日

所蔵遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
十余三四本木II遺跡	千葉県成田市十余三字三四本木	12211	062	35度 48分 21秒	140度 22分 45秒	20000501 ~ 20000629	10,000	新東京国際空港開港準備設

所蔵遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
十余三四本木II遺跡	包蔵地	旧石器末～縄文初		柳葉形尖頭器	なし
		縄文	縄穴 土坑	1基 1基	縄文土器（早・前期） 石器
		中・近世	炭焼土坑	1基	

千葉県文化財センター調査報告第425集

成田市十余三四本木Ⅱ遺跡

—航空無線施設用地内埋蔵文化財調査報告書—

平成14年3月25日発行

編 集 財團法人 千葉県文化財センター
新東京国際空港公団
成田市新東京国際空港内
(成田市木の根字神台24)

財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 弘 文 社
市川市市川南2-7-2